
赤眼の狼

如月 晃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤眼の狼

【Nコード】

N6280X

【作者名】

如月 晃

【あらすじ】

ヘクセと呼称される吸血鬼。

その有り得ない存在を狩る為に結成された自衛隊少数精鋭の特殊部隊「HAWK」。

親がいなく、幼い時から自衛隊の訓練を受けた「赤眼の狼」と称される少年「直江幸成」と「HAWK」隊員はあるヘクセを追って「華景市」に潜入する。

幸成が潜入を命じられた場所は高校であつた……

幸成を取り巻く隊員や高校生達による青春学園ダークファンタジー

序章：開幕

月夜の中の街。

街灯は無い。

その闇を照らすは月明かり。

雲一つ無い満月が照らす夜闇。

満月は青白く輝き、美しい。

昼とは違う澄んだ空気。

澄んだ空気は夜という物を形作る一つの事象であった。

その空気が不意に掻き乱されて風となる。

地面を叩く靴の渴いた音とそれに連なる呼吸の乱れた音が「静かな夜」という体系を崩していく。

その夜の中を転びそうになりながら脱兎の如く走っていく若い女性
がいた。

その後ろからは不規則で粘着室な吐息が聞こえてくる。

獲物を追い詰める猟犬のようにつかず離れずの距離で嬲るように迫
るのは男だ。

若い女性の後ろには中年で肉付きのいい中年男性が迫って来ていた。
中年の男は太っている割には足が速く、女性に張り付く様は無気味
だ。

女性は助けを求めて悲鳴をあげるが、聞こえているのか聞こえてい
ないのか、誰も家の中から出て来ない。

日本人は事件に遭遇しないように極力厄介事から遠ざかろうとする。
他人の不幸よりも自らの身の安全だけを考えて……

月夜の光で影が伸び、既に女性の影は男に踏まれていた。

既に捕まったも同然の状態で、いつでも捕まえられるのだと物語っ
ている。

女性は月明かりの中を逃れるように大きな廃工場の中に飛び込んだ。
光よりも闇を……

闇を求めた女性は鉄の扉を慌てて開け、かんぬき 門錠を掛ける。

女性は広い空間の中、後退りをする。扉を凝視した。

数秒の沈黙の後に体をぶつける音が扉の向こうから聞こえてくる。

女性は屍餅を付くと、壁まで這う。

「誰か！誰か助けてえ！！」

その悲鳴は虚しく廃工場の広い空間に^{こだま} 飢した。

元は何かの生産工場であつただろうが、今はそのような機械は無く、ひどく殺風景だ。

鉄の扉が軋む音と凄まじい轟音。

「もうすぐ僕の血肉になるんだよ？もつと喜んでよ、デュフフフ」

男の下劣な声が轟音に混じって聞こえてくる。

声音は下品で無気味、混じる息切れが澄んだ空気に絡み付く。

「誰かあ！！」

女性の悲鳴が響いた瞬間、扉が勢いよく開き、月明かりに照らされながら男が現れた。

男は口元を涎で濡らし、口元が異様に光っていた。

舌なめずりをする度に涎が口元を濡らして、月明かりで糸が引いているのが良く見える。

男は女性に歩み寄ると膝に手を当てて、先程擦りむいたであろう傷から流れ出た血を舐め取った。

「美味しい血だあ……デュフフフフフ」

男は下卑た笑いを浮かべて女性を抱き抱え、その鋭い歯を首筋に突き立てようと口を開いた……

「イヤアアアッ！！誰かあ！助けてえ！！」

女性の絶叫が轟いたその時、男の腕から血が飛び散った。

男は思わず女性を取り落とすと、辺りを見渡し、怒鳴り散らす。

「誰だ！！何者だ！！」

「ヘクセ、ブラッド・ラスター。貴様を排除する」

廃工場の天窓から一人の少年が飛び降りてきた。

両手には先程、男の腕を撃ったであろう二丁拳銃が月明かりで光つ

ている。

右手にはスライド部分が黒い拳銃と左手にはスライド部分が白い拳銃が握られていた。

特異なのはその拳銃の銃口が二つ付いている事だ。

狩猟用の上下二連シヨットガンの拳銃版のようなところか？

黒い軽装の防弾チョッキは非常に動き易そうだ。

右目には青く光るヘッドアップディスプレイ（HUD）が光っていた。

その格好は特殊部隊を彷彿とさせる。

しかし、闇夜で光るのは右目のHUDだけではなかった。

紅い左目。

月夜に照らされて顔は判然としないが、その光りを受ける左目の瞳は紅く光っている。

悪魔や化け物と形容するに相応しいその瞳は真っ直ぐと男を見つめていた。

「逃げて下さい」

少年は女性を僅かに一瞥しながら言い放ち、紅く光る瞳で扉に行くように促す。

女性は涙を流し、這いながら廃工場から逃げて行く。

男は女性を追い掛けようとしたがその間に少年が割り込み、銃を交差させつつ、引き金を引いた。

銃のスライド音だけが響き渡り、銃の発射と同時に発生する発砲炎「マズルフラッシュ」も、銃声も、弾丸が音速に達する時の音「ソニックブーム」も無い。

男の体から血が噴き出し、次々に放たれる弾丸が男を吹き飛ばした。少年は素早く銃の弾倉を交換する。

刹那、吹き飛ばされた男が人間では有り得ない跳躍力で飛び掛かってきた。

少年は素早い身のこなしでそれを避けたが男の目的は少年ではなく、女性だった。

逃げる女性に飛び掛かろうとしたその時、少年はワイヤーが巻き付けられた拳銃を構えて引き金を引く。

射出されたワイヤーの先端には銚のように尖ったフックがあり、ワイヤーはワイヤー同士、摩擦で擦れ合う音を鳴らし、男の足に絡まった。

「逃がすかー!!」

少年はワイヤー付きの拳銃を引つ張ると男は女性に指一本届かず、後ろに引つ張られた。

凄まじい轟音とともに床が陥没し、コンクリートの破片が宙を舞う。少年はワイヤーを巻き取ると再び煙の中に銃口を向ける。

（こちらスカイアイ、被害者の保護を完了。心置きなくやつちゃっていいぜえ、狼さん!）

「ロメオ、了解した」

少年はヘッドセットから流れた無線に吹き込む。

刹那、男は土煙から飛び出し、少年に飛び掛かってきた。

咄嗟の事に反応出来なかった少年は男のタックルをまともに喰らい、宙を舞う。

同時に男は壁を蹴り、宙を舞っている少年まで跳び上がり、腹部に一撃を叩き込んだ。

凄まじい速度で落ちていった少年の体は地面に落下し、男同様に地面を陥没させた。

男は地面に降り立つと身動き一つしない少年に歩み寄る。

舌なめずりしながら歩み寄る様は先程の女性に対してのような下劣さは無いものの、やはり無気味だ。

男が少年を掴みあげようとしたその時、少年は目を開けて笑みを見せながら二丁拳銃を構えた。

「Spray with machine gun fire!!
（機銃掃射だぜー!!）」

二丁拳銃の上下二連装の銃口から同時に四発の弾丸が、フルオート射撃で次々と男に吐き出されていく。

近距離で使われて拳銃は初めて真価を発揮する。

それを理解しているからこそその不意打ちは非常に効果的だ。

拳銃弾で弾き飛ばされた男は穴だらけながらも生きていた。

拳銃弾を受けて生きている例は珍しく無いが、その多量の穴で生きていられるのは有り得ない。

少年は体を腹筋の反動で跳ね上げ、起き上がると同時に男も起き上がる。

拳銃で開けられた穴は塞がり、男は再び舌なめずりする。

「いい加減にくたばれよ、吸血鬼」

少年は舌打ちをしつつ、二丁拳銃の弾倉を交換した後、ホルスターに二丁拳銃を仕舞い、腰に差していた刃渡り30cmのナイフを鞘から引き抜いた。

少年はナイフを構えると左手で柄を逆手に持ち、柄の底に右手を沿え、切っ先を男に向ける。

月が雲の影に隠れ、周囲を消し去った。

紅い瞳がHUDの明かりに照らされて明るく光る。

数秒して雲の中から月が現れて周囲を照らし出した。

同時に二人は駆け出し、重く鈍い音が響き渡る。

月の明かりに照らされた二人の影は重なり合いながら静止していた。男の胸にはナイフの切っ先が刺さり、鮮やかな血を滴らせている。

二人の動きは止まったように動かない。

不意にナイフから青白い電光が男の体に流れ、肉が焦げた匂いが漂う。

数秒の後に電光は消えて、少年はナイフを引き抜き、男を蹴り倒した。

男は痙攣しながら地面に倒れ、地面を血で濡らす。

紅い絨毯は鉄臭い匂いを発しながら瞬く間に広がり、水溜まりを作った。

「こちらロメオ。任務完了だ。抹殺対象のヘクセは殺害した」

（了解。あゝあ、眠う……とつと帰って来いよ？）

「分かってるよ」

少年は先程とは打って変わって柔らかな笑みを漏らすとHUDとヘッドセットが一体になった装置に手を当てつつ入口に歩いて行く。その時、男が拳を振り上げ少年に殴り掛かろうとする……が、それより早く少年は二丁拳銃を構えながら振り返った。

「Jack pot!!（大当り!!）」

吐き出された四発の弾丸は男の眉間を撃ち貫き、男を吹き飛ばす。同時に男の体は溶けていき、コンクリートに溶け込んでいった……

1 - 1 : 潜入調査（前書き）

第1話

1-1: 潜入調査

吸血鬼……

誰もが一度は聞いた事はある単語だろう。

生命の根源と言われている血を吸う存在だ。

血を吸う存在などと笑う人もいるだろうが、実際、生物学的に利に適っている。

血液は高栄養の液体であり、ノミやシラミ、蚊等が良い例だろう。

その血を吸う人間は「ヘクセ」と呼称されている。

勿論、存在は極秘で知っているのは政府高官と一部の優秀な自衛官だけだ。

大々的に公表すればという意見も有るだろうがヘクセの特徴がそれを困難にしている。

一つ、ヘクセは人間と同じ姿で、目視で見分けが付かない。

結果、人々は疑心暗鬼に陥り、暴動に陥る可能性が出て来る。

一つ、ヘクセは特殊な能力や並外れた運動能力を持っている。

ヘクセはその通り、特殊能力、つまりは超自然的な力を操る事が出来たり、人間離れた身体能力を持っている。

前述の理由も加えると最悪の事態に陥ってしまう。

また、血を吸うという事はつまり、人間を必然的に襲うという事だ。さらに民間に伝えられないという事実を考慮した場合、被害者は何かが何だか分からない内に捕食・吸血されるという事になる。

被害者は行方不明にするにしても、あまりに多過ぎる被害者に政府は特殊部隊を設立した。

「Hexe Annihilate Weapons and Killers」、通称「HAWK」は少数精鋭の特殊部隊だ。

階級は問わず、若く優秀な自衛官達を集めて設立されたHAWKは言ってしまうと不正規部隊だ。

自衛隊の英才教育を施した親がいない子供や天才的な自衛官だけを

集めたこの部隊には徽章を六つも持った化け物じみた自衛官さえいる始末。

どこの厨二病設定かと思うがそんな人物がいるのなら仕方ない。

そしてHAWKは、いや全世界の警察官や特殊部隊はある男を追っていた。

カズイクル・ベイ・ツエペシユ。

彼は謎が多いが、大胆でヘクセ史上主義を掲げる秘密結社「シュトレイゴイカバル」を率いている。

シュトレイゴイカバルは言ってしまうえばテロ組織だ。

人間は勿論、同胞のヘクセですら殺す集団であり、世界から極秘に狙われている。

様々な名前で呼ばれ、報道されている殆どのテロ組織がシュトレイゴイカバルなのだ。

そんな組織がある市に潜伏したとの情報を手に入れたHAWKは政府の特命を受けて、その市に潜入調査を開始した……

華景市。

80000人にも満たない人口の小さな市で430平方キロの面積のこの市に到着した一台の白いワゴン車。

「はい、御一行様、到着でございます」

口周りに無精髭を蓄え、体格はがっちりし、糸目の男性は柄にも無い声で運転席から出て来る。

181cmの巨体に厳つい印象に、始めてみた人は熊を連想するだろうその人物はノリノリで小さな荘、つまり、木造のアパートをツアーガイドのように紹介していた。

今年34歳の直江三村三等陸佐、それにしてもこの男、ノリノリで

ある。

「おっちゃん、何かキモいわ」

金髪のセミロングを後ろで結び、青い瞳の整った顔立ちの少年は頭
の後ろで両手を組みながら小声で呟いた。

その声に口を尖らせた三村は先程の少年に切り返す。

「うつせ！ほつとけ！」

三村は17歳の日系ハーフの少年、ロイ・カブラギ陸士長を睨む。

「あらあら、相変わらずですねえ、お二人さんはあ」

ロングヘアの流れる黒髪に垂れ目で大人びた顔立ちの女性はDカッ
プの胸の前で腕を組む。

微笑みを湛えるその20歳の女性、比叡彩花^{ひえい あやか}三等陸曹はいつもの光
景を温かく見守る。

「はいはい、そこまでですよ」

黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちのボーイッシュな少女は手を
叩きながら二人を諷める。

「全く、相変わらずなんだから！」

19歳の少女、氷川優一^{ひかわ ゆう}等陸士は腰に手を当てながら嘆息を漏らす。

「と、そっぴや幸成は？」

ロイは周囲を見渡しながら呟くと、助手席で爆睡している少年を見
付け微かに笑う。

「寝てるよ……」

ロイは頭をポリポリと掻きながら助手席に向かって歩き、爆睡して
いる少年の頭に一撃を叩き込んだ。

「ついた！」

少年は頭を押さえ、眠い目を開けながら、半ば憎らしそうにロイを
見上げる。

その見上げた切れ長の目の片方、左の瞳は紅く染まっていた。

紺色のセミショートに整った顔立ちの少年は大きな欠伸を漏らすと
助手席から降りた。

17歳の直江幸成^{なおえ ゆきなり}は六部屋ある荘を見て再び大きな欠伸を漏らす。

「着いたのか？」

「ああ。おっちゃん、説明をよろしく」

「おう！」

三村は咳ばらいをするとワゴン車の荷台からノートパソコンを取り出し、ディスプレイを指差す。

そこに映し出されていたのは華景市の航空写真だ。

「今回華景市に潜入したのは他でも無い。シュトレイゴイカバールの情報を掴んだ。自分達はそれを殲滅する。ここまではいつも通りだな？」

三村の声に全員が頷くと、画面が変わる。

「今回、シュトレイゴイカバールがある財閥と接触した形跡が見付かった」

「財閥ですかあゝ」

彩花は間延びした声で問い掛ける。

彩花が喋ると妙に気が抜けてしまうのはその口調が容姿か、判然としないがどちらにせよ和んでしまう。

「神宮寺財閥。華景市を拠点とする財閥で市の資金源とさえ言える財閥だ。生命工学に突出した財閥だけに、シュトレイゴイカバールがその財閥に接近したのは何故か調べる必要がある。自分達はそれを調べながら、ヘクセを狩る」

「潜入調査ですか？」

「簡単に言えばそういう事だ」

優の声に答えた三村はエンターキーを押すと画面が変わる。

映し出されたのはストレートヘアでセミロングのボブカット、可愛い顔立ちに赤縁の眼鏡の少女の写真が映し出された。

「神宮寺鳳寿、神宮寺財閥の御令嬢だ。現在、華景高校で一年生をやっている」

「成る程……ん？おっちゃん、さつき潜入とか言っただな？」

幸成は首を傾げながら苦笑いを浮かべると、三村はニヤニヤと笑って幸成の肩を数回叩いた。

「察しがいじゃないか？流石、HAWKでエージェントを担当しているだけあるな。お前には華景高校に潜入してもらう」

HAWKの隊員は五人。

その役職は五つあり、それぞれエージェント、オペレーター、メディック、メカニック、トランスポーターとなっている。

それぞれその名前の通りの仕事である為、察して頂くという形で……幸成はエージェント、ロイはオペレーター、彩花はメディック、優がメカニック、三村がトランスポーターを担当し、任務を行っている。

ここで話を戻そう。

「おっちゃん、それはおかしい！いや、確かに俺はエージェント担当だけど……俺、大学の過程修了してるし！」

「つべこべ言わない！お前は本来だったら高校生だ。学校を嫌がるとは引きこもりの前兆か？」

「いやいやいやー！」

「はいはいい。まあ、青春を楽しめるのですからあいじゃないですかあ？ウチはそんな余裕は無かったですよあ？」

彩花は幸成同様、大学の過程を修了し、医師免許を持っているが、高校での青春時代を送れなかった。

そんな人の言葉を無下に出来るはずもなかった。

「まあ、彩花さんがそういうなら……」

幸成は嘆息を漏らしながら呟くとロイが「羨ましいね」とほくそ笑む。

人の不幸でメシウマ、つまり「他人の不幸は蜜の味」という意味の笑いではないが、このロイの笑い顔、妙に腹立つ。

そんなロイに三村はこれこそメシウマという顔で言い放った。

「ロイ、お前もだ」

「俺もかよ！」

「当然だろう？エージェントの補佐するのがオペレーターの役目だ。明日からは新学期。そこにお前達が転校というシナリオで二年

生に入ってもらう」

「ボクも一歳若ければ入れたのに」

優は頬を膨らませながらそつぽを向く。

何か、不安になってきたな、ホント……

幸成は空を見上げると苦笑いを浮かべたのだった……

登場人物：HAWK（前書き）

登場人物：HAWK

登場人物：HAWK

直江 幸成 （17）

階級：陸士長

コードネーム

「ロメオ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」では現地に赴く「エージェント」を担当している。大学の教育過程を修了している。紺色のショートヘアで切れ長、左目が赤い瞳のオッドアイ、身長は172cm、整った顔立ち。性格は平時は真面目で礼儀正しい好青年、有事は仇成す者は皆殺しにする冷徹な性格。ヘクセ秘密結社「シュトレイゴイカバル」を追って華景高校に潜入調査をする事となる。

ロイ・カブラギ （17）

階級：陸士長

コードネーム

「スカイアイ」

一人称「俺」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」ではエージェントを補佐する「オペレーター」。金髪

のセミロングを後ろで結んでいる。身長は174cm、青い瞳に整った顔立ちの日系ハーフ。女垂らしな性格で女性を見たら声をかけずにはいられないが、作戦時には真面目に幸成をサポートし、監視カメラをハッキングするなどしてサポートする。共に華景高校に潜入する。

比叡 彩花 (20)

階級：三等陸曹

コードネーム
「アンビュランス」

一人称「ウチ」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」では治療を担当する「メディック」。垂れ目で大人びた顔立ち。身長は165cm。Dカップ。おっとりとした口調で喋る。18歳で大学の卒業過程を終了しており、薬品の知識は医者と同等かそれ以上。

氷川 優 (19)

階級：一等陸士

コードネーム

「アーキテクト」

一人称「ボク」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」ではエージェントの武器を作る「メカニック」を担当している。黒髪のショートヘアで中性的な顔立ちの為、美少年に間違われるがボーイッシュな少女。Aカップ。身長は168cm。可愛い物と銃が大好きと変わった趣味を持つ。意中の人には尽くす性格。家庭的で家事が得意。

直江 三村（34）

階級：三等陸佐

コードネーム

「フリーゲル」

一人称「自分」。対ヘクセ極秘殲滅特殊部隊「HAWK」所属の隊員。「HAWK」においてエージェントを輸送する「トランスポーター」を担当している。「HAWK」の中で最年長。口周りに無精髭を蓄えていて、体格はガツチリしており、目が細い。身長は181cm。面倒見がいい性格でノリがいい。部隊の仲間からは「おっちゃん」や「直江さん」と呼ばれている。

1 - 2 : 登校

晴れ渡る青空。

雲の無い青空の薄い青は人の心を落ち着かせる。

その薄い青に輝く太陽は街を明るく照らしていた。

小さなこの市は中心街も人通りが少なく、車の通りも少ない。

田舎とも言えるこの市の中心街に幸成とロイが潜入を命じられた「華景高校」がある。

華景高校は生徒数が450人程度の学校だ。

華景高校から幸成達が暮らすアパート「雫荘」は徒歩20分。

軽い運動には調度いい距離だ。

幸成は紺色のブレザーにネクタイ、淡い藍の鼠色がかった色「湊鼠」のズボンに身を包み、カバンを肩に担ぎながら空を見上げた。

「晴れてるな……」

思わず呟いた幸成は左目に触れた。

流石に紅い瞳は隠さなければと、彩花が気を利かせて買ってきたのが黒のカラーコンタクトだ。

実際、カラーコンタクトで瞳は隠れたが、カラーコンタクトは目にあまり良くないと聞く。

多少目に違和感があり、早く馴れなければと溜息を漏らす。

その時、幸成の横でロイの声が聞こえ、幸成は溜息を漏らして、ロイを見遣った。

単純に言おう。

ロイはナンパをしていたのだ。

ロイがナンパしていたのは墨を流したような美しい黒髪を肩まで伸ばし、左右前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている少女だ。身長は162cm、二重瞼で目鼻が整い、唇も潤い、綺麗なピンク色をしている。

HAWKの巨乳担当の彩花よりも大振りの胸が思わず目に入った幸

成は反射的に目を逸らしつつ、道の反対側にいるロイに歩み寄った。
「君って華景高校の生徒？何年生？」

「あの……えっと……」

返答に困っている、白く典型的なセーラー服を着た少女は怯えたように周囲を見渡している。

田舎だからナンパの経験が無いようだが、このプロポーションと容姿なら間違いなく東京等の都会でナンパかモデルスカウトに捕まりそうであった。

ロイが返答に困っている少女に、答えを待たずに次の質問をしようと口を開いたその時、幸成の拳がロイの頭に直撃する。

頭を押さえたロイが口を開くより早く、幸成は「すいません」と少女に一礼し、ロイの襟を掴んで足早に学校に向かって行った。

「何だったのかしら？」

少女はキョトンとしながら、ロイを引きずって行く幸成を見送った。

「サヤ、おはよう」

サヤと呼ばれた少女は振り返ると、駆け寄ってくる小柄な少女に挨拶を返し、学校に歩いて行った……

先程の少女から離れた事を確認した幸成はロイの襟から手を離し、溜息混じりに呟いた。

「お前は何なんだ？」

「何なんだとは、何だ！」

幸成に毅然とした態度で返したロイはやたらと堂々としている。

本当に何なんだ、コイツは？

「仮にも潜入だ！！朝っぱらから堂々とナンパする奴が何処にいる！？」

「ハッハッハー！ここに居ますぜ」

ロイは悪びれずに自らを親指で差す。

……ダメだ、コイツ……

幸成は紺色の髪を掻き上げると面倒臭そうに、苛々しながら多少声を荒げ、ロイに言う。

「おっちゃんに目立つなつて言われてるんだから少しは自重しろ！

！ナンパは悪い事とは言わない……いや、悪い事だが……登校初日でアホな事をやらかすな、アホ！」

「……幸成、声大きい」

ロイの言葉にハッとした幸成は周囲を見渡す。

学生や通勤者の視線が幸成に集まり、周りの視線を独り占めとはまさにこの事だった。

幸成は声のボリュームを落とし、続ける。

「とにかく、だ。目立つな！」

「はいはい」

ナンパしてた時より目立ってたんだが、とツツコミたい衝動を喉の奥で飲み下したロイは頭の後ろで手を組んだ。

なんだかんだ、気が付いたら既に学校の前、二人は校門の中に入った。

華景高校は木造で、四階建ての学校だ。

木造と言っても、昭和をモデルにしたドラマで見るような風情がある学校ではなく、真新しい学校だ。

元々は古い学校だったが、神宮寺財閥が資金を出して、今の学校のような木の学校に新しく建て替えたという訳だ。

木の温かい雰囲気を感じ出す華景高校に入ると、木の心地の良い香りが二人を包み込む。

杉の柔らかく、温かい香りを二人は肺一杯吸い込むと、幸成は昇降口前の校内の案内地図を見る。

昇降口から右に曲がれば職員室、左は教室棟だ。

取り敢えず転校初日の挨拶にと、幸成とロイは上履きに履き換えて、

職員室に向かう。

「しかし、その監視対象者が一年生なら、一年生に編入させればいいだろうに……」

手を頭の後ろで組んだロイが呟くと、幸成がロイを一瞥して答える。「いくら潜入調査って言っても、年齢的な外見はごまかせない。しかも、学費は払わなきゃいけないだろう？学費が二人合わせて二年分しか出なかったそうだし……」

流石、貧乏部隊と二人は同時に溜息を付いた。

HAWKは民間に極秘で吸血鬼と戦っている少数精鋭の部隊、と聞けば最強と誉れ高い特殊部隊の「SAS」や映画等でも有名な「デルタフォース」といった特殊部隊を思い浮かべる人も多いだろう。

しかし、HAWKは吸血鬼^{ヘクセ}という非日常を相手に、しかも極秘で戦うという理由で防衛費は少ししかもらえていない。

何故なら、政府高官や一部の自衛官しか知らないヘクセという存在に防衛費を多く出したら、それこそ金の流れを辿って最終的にHAWKにたどり着いてしまう。

貧乏とは言っても、最低限の弾薬の補給や武器の支給も行われているが、それもやはり最低限。

支給される弾薬は「9mmパラベラム弾」と言われる威力が低い拳銃に使用する弾丸と、武器は米軍が使用する「M9」ことベレッタ社の拳銃「M92FS」のエリートモデル「M92FS-エリートIA」が数丁。

極秘部隊なら映画で暗殺に用いられる「サプレッサー」という弾丸の発砲音を抑制する装備も使うと想像するだろうが、実際サプレッサーは消耗品であり、用いる事が出来ない。

その為、わざわざ部隊に武器を改造する整備士^{メカニック}という職業が設けられているのだ。

そして今回の潜入の拠点も木造六部屋の小さなアパートという訳だ。唯一、ヘクセは創作上の吸血鬼とは違い、心臓に杭を打ち込む事をしたり、銀の弾丸でなければ倒せないという訳ではない事が救いだ

ろう。

それでも大量の弾丸が必要だが……

「貧乏って辛いな……」

二人は同時に呟くと、校長室の扉を開ける。

二人が挨拶をするより早く、学校長「佐藤正臣^{さとう まさおみ}」は二人に笑顔を見せた。

「君達か、転校生は？」

「直江幸成です」

「ロイ・カブラギです」

「二人ともそう硬くならず、気楽に構えて下さい。そこに掛けて下さい」

「失礼します」

二人は同時に答えると、黒いソファに腰掛け、佐藤も腰掛ける。

「君達には二年生のBクラスに入ってもらおう。この学校の事で分からない事があつたら、Bクラスの学級委員長に頼むといい」

「学級委員長？」

幸成が小さく呟くと、扉が開く音が聞こえ、優しい声で入室の挨拶が聞こえてきた。

佐藤はゆつくりと立ち上がると声の主を見ながら「彼女が学級委員長の三神沙耶那^{みかみ さやな}さんです」

二人がソファから立ち上がり、後ろの校長室の扉を見ると同時に素っ頓狂な声を漏らした。

狐につままれたような、所謂ポカンとした顔で少女を見る。

少女は、朝にロイがナンパしていた少女だ。

「貴方達は朝の……」

沙耶那は口を掌で隠し、驚いている。

第一印象は最悪だろう……

幸成は恨めしそうにロイを見るが、ロイは運命の出会いといった表情で喜んでいる。

誰のせいで胃が痛んでいると思ってんだ、このスタイリッシュな天

気野郎？

幸成は軽く胃を押さえつつ、少女に会釈すると少女――沙耶那は満面の笑みで返した。

「直江さん、カブラギさん、校長先生からお話は伺っております。ようこそ、華景高校へ」

沙耶那は天使のような温かい笑みで二人を迎え入れたのだった……

1 - 3 : 初日

職員室を出て、昇降口を通った三人は奇妙な雰囲気だった。

初対面という事も有るだろうが、それよりも最大の原因は朝のナンパだろう。

いくら三神沙耶那が学級委員長で、寛大な人物でも流石にナンパは

……

幸成は深い嘆息を漏らすと、「三神さん」と沙耶那の名前を呼び、歩みを止めた。

「朝は本当にすいませんでした」

取り敢えず今は謝るしかない。

失礼したのはこっちなものだから……

「この馬鹿が失礼な事を……」

「馬鹿野郎！可愛い女の子を見たら声をかける。基本だろう」

何の基本だよ？

幸成は素早くロイの後頭部を押して、無理矢理謝らせた。

まるで犯罪を犯しても、悪びれない息子を謝らせる親の気分だ。

沙耶那は数回目をしばたかせると笑みを見せた。

「朝の事は気にしないで下さい。ビックリはしましたけど、気にはしてませんから」

鈴の音のように済んだ笑い声をしてみせる。

つくづく良い人で良かったと思った幸成は顔を上げて笑みを返した。

「教育棟の三階が二年生の教室です」

沙耶那は階段を上がりながら続けた。

「二階は三年生、四階は一年生です」

「一階は何の教室ですか？」

「一階は補習の教室ですよ。テストで赤点を取ったらその教室で放課後、一ヶ月の間勉強をして、その後追テストを行って八割の点数を取ったら晴れて自由の身となります。とは言っても内容は難しく

なりますので、中々自由には成れないですが……お二人共、気を付けて下さいね？」

「だってさ、ロイ」

幸成はロイを肘で小突くと「俺!？」と素っ頓狂な声を漏らす。大学を修了している幸成はともかく、高校を修了していないロイには少なからず関係のある話だろう。

その時、二人の様子を見ていた沙耶那は口に手を当てて笑った。

「お二人は仲が良いんですね？」

「まあ、仕事の都合ですから……」

「仕事？」

幸成の「仕事」という単語に沙耶那は小首を傾げた。

やってしまったという後悔よりも先にごまかす言葉が幸成の口から飛び出す。

「はい。身内の仕事の都合です。俺とロイの身内の人、同じ仕事場で働いているので転勤したら毎回一緒に学校の学校に転校になるんですよ」

少なくとも嘘は言っていない。
HAWKのメンバーは身内同然だし、ヘクセを狩るという「仕事」には変わり無いからだ。

言葉とは少し変えれば真実にも偽りにも変わり、解釈の仕方でのようにも捉えられる。

結局、言葉とはそういう物だ。

幼い時から話術を仕込まれた幸成には造作も無い。

「だからそんなに仲が良いんですね」

沙耶那はニコリと微笑み、階段を上り切る。

しかし、よく笑う人だと思い、幸成は沙耶那の後ろ姿を一瞥した。揺れる黒髪が窓から漏れる光を浴びて光り、その美しい色を際立たせる。

モデルのようなプロポーションに見とれているうちに、教室の前にとどり着いた。

ークラス約30人の男女共学の教室からは転校生が来るという事に

浮かれている為か、妙に騒がしい。

たいていの場合、男子は女子が、女子は男子が来たらテンションが上がるものだと聞く。

悪いな、二人とも男で……

幸成が自嘲的な笑みを見せると同時に沙耶那が教室の扉を開け、中に招き入れる。

二人は一礼しながら入室すると女子の黄色い声が響き渡り、幸成は思わず気圧された。

ロイはというと何故か英雄気取り（？）で手を振っている。
能天気でいいよな……

いや、俺が気負い過ぎ？

幸成は苦笑いを浮かべるとクラス全員を見渡す。

「自己紹介をお願いします」

沙耶那が二人を見ると、ロイから口を開いた。

「ロイ・カブラギ。よろしく頼むわ。ちなみに女性なら可愛ければ誰でもOKだ」

相変わらずだ……

とは言っても、こんな馬鹿が国の密命を受けた者だとは誰も思わないだろう。

「直江幸成です。早く馴染めるように努力します。よろしく願います」

同時に女子の黄色い声が教室中を揺るがし、幸成は苦笑した。

何なんだ、この空気は……！？

正午になり、栗荘で待機していた優が昼食のチャーハンを作っていると、挨拶に廻っていた三村と彩花が帰ってきた。

二人は同時に居間に大の字に倒れる。

雫荘の一部屋の広さは居間が8畳、お風呂、トイレ付きでキッチン完備、と聞けば良いだろうがやはり貧乏部隊。

かなり古い建物であり、ゴキブリは勿論、蛇や蜥蜴も入って来る始末。

しかも、元は幽霊屋敷と言われていた為、優とロイから猛反対された。

ちなみに彩花は大賛成であった……

結局、三村のgori押しと予算の都合でこの雫荘となったのだ。

「お疲れ様」

優はフライパンのチャーハンを三等分に皿に盛り、両手で器用に運び、中央のちゃぶ台に置いた。

「どうだった？」

優は蓮華をそれぞれのチャーハンに差しながら問い掛ける。

挨拶、というのは実際の所は建前であり、この街の噂を収集する為だ。

噂には都市伝説も含まれる。

つまりは口裂け女や人面犬等の話だ。

火の無い所からは煙りがたたないとは言ったものだが、実際はその通りである。

口裂け女も、紐解けば様々な事件が、まるで伝言ゲームのように口頭で語られるうちに変化していったのがよく分かる。

ましてやヘクセ自体が殆ど都市伝説のような物であり、噂として語られるならまさしく、口裂け女のように語られているだろう。

そう踏んだ三村は情報、つまり噂を収集していたのだ。

「収穫有り、だ」

三村はチャーハンの蓮華を掴むと一口食べてから続けた。

「最近、この街で変死体が多発しているらしい。血を吸われた死体が、な」

「ヘクセですねえ」

彩花はのほほんと応えと、三村はチャーハンを掻き込む。

作った本人としてはしっかり味わって欲しいと思うだろうが、任務の話の時はさして気にしていなかった。

「学生達の間には流布していた『血吸い人』の話に酷似している」

「血吸い人？」

「夜、帰りを急いでいた女性が血吸い人に襲われて、血を吸われるという話だ。現代版吸血鬼伝説みたいな都市伝説だがそれが現代に蘇ったと住民達は噂している」

「噂って凄いですねえ」

彩花はいつの間にかチャーハンを食べ終え、そしていつ煎れたか分からない紅茶を啜っている。

彩花って凄いと優は苦笑いを浮かべた。

「今回、シュトレイゴイカバールを相手にするという事情から、政府から偵察衛星を買った。アメリカ軍のお下がりだから、旧式だが

……」

やっぱり貧乏部隊……

が、偵察衛星を買えただけ良しとしよう。

三村はチャーハンを食べ終えた皿に蓮華を置き、白いワイシャツの胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえた。

そして、煙草に火を点して、肺に紫煙を吸い込むと一気に吐き出し、小声で呟く。

「幸成、楽しくやってるかな？」

「心配なんですかあ？」

彩花は新しい紅茶にミルクを入れて、スプーンで掻き混ぜると口に運ぶ。

飲む前に香りを味わうその姿は優雅で上品なお嬢様そのものだ。

「まあ……あまり人と触れ合う事が無かったからな、幸成は……」

「レンジャー徽章乙、空挺徽章、格闘徽章、体力徽章、射撃徽章を保有でしたっけ、彼？」

「特殊作戦徽章もだ」

徽章きしょうとは優秀な自衛官に送られる、言わば勲章と思つて貰えればいい。

それは様々な物があるが、陸上自衛隊は15種類有り、そのうちの6種類を幸成が有している。

「幸成は小さな時から訓練を受けていたから、無理は無い。化け物じみた体力と回復力、そして瞬発力にあの瞳……自分だつて、最初はヘクセを疑つたさ」

三村は眉間に皺を寄せながら煙草を吐き出す。

過去を思い出しているようなその顔には深い皺が刻まれていた。

「ヘクセのフェロモン反応は陰性の為、人間という結果が出た。しかし細胞活性速度は通常の二倍。まるでヘクセと戦う事を運命付けられ、この世に生を受けたとしか思えないんだよ、幸成は……」

「だから捨てられていたのかもしれませんがねえ」

彩花は小さく呟くと、紅茶のカップを置いて溜息をついた。

「だが、自分が幸成を拾つた以上は最後まで育てるのは当然。そりや育ての親なら心配するだろう？」

三村は灰皿に煙草の灰を落とすと、優はチャーハンの器を片付け始めた。

「とにかく、大丈夫ですよ。イジメとかも対処出来そうですから」

「いや、自分が心配しているのはそこじゃない……幸成に彼女が出来るかだ」

「そこですか！？いや、初日に出来たら凄いですけど……出来ないでほしい……」優は聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、

彩花は口に手を当て、声音に笑いを含んで優に呟いた。

「頑張つて下さいねえ」

優は動きを止めると、顔を引き攣らせた。

優の呟きが聞こえなかった三村はというと理解出来ずに、二人を交互に見遣る。

と、不意に三村は思い出したように口を開く。

「そついや、偵察衛星とパソコンとのリンクつてどうやるんだ？」

「そういうのはロイ君の担当ですからあ、ウチ達にはあ分かりませんよ〜?」

「仕方ない。あいつらが帰ってくるまで自由時間だ。偵察衛星が使えるなきゃ、ヘクセを探すにも探せないからな」

三村はそう言くと、灰皿に煙草を押し付けた……

1 - 4 : 昼休み

一方、三村達が昼食を取っていた頃、幸成とロイも昼休みとなっていた。

高校の休み時間は基本的に10分だが、昼休みだけは昼食を食べる時間も含めて30分の休みだ。

それぞれが思い思いの時間を過ごす昼休みは生徒達には憩いの時間に等しい。

その中で幸成とロイはそれぞれ購買で買った焼きそばパンとタマゴサラダのサンドイッチを手にながら屋上に出た。

屋上は中央に数個ベンチがある簡素な所で落下防止用の金網が張つてある程度だ。

二人はベンチに座るとパンの袋を開ける。

食欲をそそる香りが二人の胃袋の虫を唸らせた。

「腹減つてたんだな」

幸成は小さく呟くと、焼きそばパンを咀嚼する。

「お前は良いよな、ホント」

「ロイ、どうした？」

「お前、女にチャホヤされ過ぎだぜ？」

「そうなのか？」

幸成は素つ頓狂な声を漏らすと再び、パンを咀嚼した。

朴念仁、ぼくねんじん唐変木とうへんぼくを体現する幸成はと言うと、女子に黄色い声をあげ

られ、女子が周りを取り囲み、昼食に誘われるという男子なら憧れるであろうハーレム状態となっていた。

そしてそれを全て蹴るという愚行を犯した幸成は今に至る。

ロイはというと逆に女子からではなく男子に受けていた。

男子はお調子者や目立つ者を囃し立てる傾向が有るが、ロイはそれに当て嵌まり、一躍男子の人気者となったのだ。

最も彼にとっては不本意であり、幸成のような行為は恨み節の対象

になる。

「どうして幸成だけモテるんだ!？」

ロイの魂の叫びに幸成は冷静に突っ込んだ。

「その性分だろう?」

「マジで返されると返答に困るんだが……」

「顔は良いのだから、考えられるのはそれだけだろうからな」

「つまり、黙ってればイケメンって事か?」

「そういう事になるだろうな」

幸成はそう答えると紙パックの小さな牛乳にストローを差した。

「モテてる奴に本気で返された時の破壊力半端ねえ!」

しかし、今日はよく喋る、と幸成は横で騒ぐロイを一瞥し、牛乳を吸う。

と、その時、屋上のドアが開き、見知った顔が現れた。

「あれ?先客がいた」

沙耶那は二人を見付けると微かに微笑む。

手には女の子らしい可愛い風呂敷に包まれた弁当箱がある。

そしてその沙耶那の後ろには別にもう一人、小柄な少女がいた。

薄い茶髪に右側のサイドテール、前髪は自然な感じで童顔な少女は、外見だけでは高校生とは分からず、小学生に見紛う程に小柄だ。

「サヤ、この人達が転校生?」

「そうだよ、ナツ」

沙耶那はナツと呼んだ少女を一瞥すると二人に紹介する。

「こちらは私の友達の藤宮菜月ちゃん。Aクラスだからあまり交流ないだろうけど、仲良くしてあげてね」

「サヤ、子供扱いしないでよ!取り敢えずよろしくね」

菜月が笑い、その口元から八重歯が零れた。

その八重歯が彼女の幼さを強調している。

流石にこの幼女と言える少女にロイは手を出さないだろうと幸成はロイを一瞥した。

が、その考えは甘かったと打ちのめされる。

「俺はロイ・カブラギ。可愛い女の子なら誰でもいい！ストライクゾーンしかない男だ！」

「……つまりは変態さんって事だよね？」

菜月の一言はロイの熱い魂を木っ端みじんに粉碎するには十分であった。

アイデンティティをクラッシュされたロイは呆然と、真っ白に燃え尽きる。

そう、真っ白に……

「いつもここで昼食を食べてるんですか？」

「うん。そうだよ」

菜月は笑みを浮かべて頷くと向かいのベンチに腰を下ろした。

ベンチにギリギリ足が届く程度の身長の子は足をパタパタと動かす様子はどう頑張っても子供にしか見えない。

「女子は皆騒いでたよ？王子様が現れたってさ」

菜月は風呂敷を開けて弁当箱の蓋を開ける。

「王子様って俺か？」

ロイの一言に菜月は笑みを掻き消し、不穏な笑みで切り返す。

「変態さんな訳無いじゃん、馬鹿なの？」

この子、おつかねえ……

幸成が苦笑いを浮かべると、沙耶那は弁当を口に運ぶ。

菜月はと言うと、幸成をまじまじと眺めている。

「カツコイイよねえ？え〜っと……」

「直江幸成です」

「ユキ君だね？芸能事務所に所属してたりする？」

「いや……」

「勿体ないよ、絶対売れるだろうに……」

「俺はそういうの興味ないから……」

「釣れないなあ」

菜月は頬を膨らませると水筒の蓋をコップの代わりに、少し濁った水のような液体を注ぎ、口に運ぶ。

スポーツドリンクのような液体を口に運んだ菜月は一息つく。

「またそれ飲んでるの？」

「美味しいよ？サヤもどう？」

「私は遠慮するよ」

「その飲み物は？」

幸成の問い掛けに菜月は飲むかと目で問い掛けるが、幸成は「いい」と答える。

「そう言えば、夜に外に出ちゃ駄目だよ」

菜月は水筒に蓋を取り付けながら首傾げながら上目で幸成を見る。

「どういう事ですか？」

「最近、無差別殺人が起こってるんですよ」

「三神さん、無差別殺人とは一体？」

「沙耶那でいいですよ」

沙耶那は柔らかい笑みで答える。

幸成は咳ばらいをし、「分かりました、沙耶那さん」と訂正した。

「夜に歩いていたら人が血を吸われるという事件です。現在、警察が捜査していますが危険な為、市民には夜間の外出禁止令が出ています」

成る程、政府の手回しが既に完了していたか……

「その犯人ただけだね？運よく逃げ延びた人の話によると白い狐の御面を付けた、刀を持った白い着物の人なんだって」

「白い狐？」

「この市の伝承に白狐びゃくこの伝説があつて、鬼を退治して神様になったって話だよ。でも、その狐とは違うね」

菜月は笑い声を漏らすと、沙耶那は真面目な顔で切り返す。

「しかし、生き残った人が錯乱して犯人を見間違えたかもしれないですよ？」

「可能性としてはなくは無いが、そのような出で立ちをしているなら犯人と考えられなくはないですね」

幸成は牛乳パックを握り潰す。

白狐なんて今まで聞いた事がない。

刀を持っていると言っていたが、ヘクセにも武器を持っている者はいるが、御面は見たことがない。

シュトレイゴイカバールの儀式か何かか？

幸成が思考を巡らせていると同時にチャイムが鳴り響いた。

「……俺達は今行くわ」

「分かりました」

「おい、行くぞ」

真っ白に燃え尽きたロイを無理矢理立たせると幸成は歩いて行く。

アイデンティティを完全破壊されたロイは力無く幸成に引つ張られて行った……

古い教会……

錆びた十字架と寂れたステンドグラスとイコン画。

そこには多数の老若男女が集まっていた。

中央の蠟燭が立てられた台座の前に立つのは若い男性だ。

男性は旗が括り付けられた槍を掲げている。

旗には紅い月をバックに髑髏どくろがあり、その髑髏に交差する鎌が描かれた悍ましい物だ。

「我々、シュトレイゴイカバールは計画の第一歩を歩き出す。今日が最初の一步だ。この世の下等な人間は奴隷と食料に……そして我々、ヘクセが世界を築き上げる」

男の声に多くの者が歓喜の声をあげる。

「下等な人間供に死を……」

彼らの輪唱が周囲を揺るがし、教会に訝する。

「人間は我々を化け物として扱ったが、二度の大戦を引き起こした

人間は我々以上の化け物だ。このままでは人類が滅びる。我々が愚かな人間に代わり、世界を支配する」

輪唱が結託の声に変わる。

古いプロパガンダのような演説を終えた男は片手を高く振り上げた。

「さあ、ゲームの始まりだ！！」

設定（前書き）

1 - 4 までの設定です

設定

HAWK

正式名：Hexe Annihilate Weapons and Killers

吸血鬼を殲滅する為に作られた特殊部隊。管轄は陸上自衛隊。少数精鋭の為、隊員は5名。存在は民間には極秘とされている。資金の流れから足取りを掴ませない為に防衛費は少ししか貰えていない。

担当

・エージェント

現地に赴き、ヘクセの殲滅を担当する隊員。殲滅以外にも潜入調査やヘクセに捕まった人間の救助等もある。

・オペレーター

エージェントに無線で指示を出す隊員。リーダーや偵察衛星を用いてエージェントに指示を出したり、潜入調査の補佐を行う。

・メディック

エージェントの治療を行う隊員。身体的治療から精神的治療等を行う。また、エージェントを安心させる為に隊員は女性が選ばれる。

・メカニック

エージェントの使う武器や道具を作る隊員。エージェントやオペレーター等の使う武器や機器を作る事が主な任務。

・トランスポーター

エージェントを現地まで輸送する隊員。車の他にヘリコプターを操縦し、現地に向かう為、エージェントの次に危険な担当と言える。

ヘクセ

人間と同じ姿だが、化け物じみた身体能力や特殊な能力を扱う事が出来る人間の総称。所謂「吸血鬼」で人を襲い、血を吸う。「朝に活動出来ない」や「ニンニクの匂いに弱い」、「十字架や銀の弾丸を受ければ体が消滅する」、「心臓に杭を刺せば死ぬ」という事は無く、弾丸等で倒せる。しかし、生命力は当然のように高く、頭を撃ち抜いたり、心臓を串刺した程度では死なない。前述の特殊能力からドイツ語で「魔女」という名前が与えられている。

神宮寺財閥

神宮寺龍一郎が率いる財閥。薬品・生物産業に秀でている。ヘクセと何らかの繋がりがあると思われるが具体的な証拠がなく、財閥という理由で警察も手出し出来ないのが現状。

シュトレイゴイカバル

ヘクセ史上主義の秘密結社。創設者はカズイクル・B・ツエペシユ。目的は不明。エンブレムは紅い月に髑髏、それに重なる交差した鎌が特徴。人間を夜な夜な拉致して血を吸うという悪業を行っている。人間は勿論、裏切り者のヘクセですら問答無用で殺害する。

華景市

はなかげ

某県にある市。市では行方不明事件（ヘクセに殺された）が多発している。人口約80000人、面積は430平方キロ。

華景高校

華景市にある最も大きい木造の高校。男女共学。学力は平均レベル。全校450人の学校。運営しているのは神宮寺財閥。

栗荘

HAWKメンバーが住んでいる木造のアパート。家主は直江三村という事になっている。部屋数は六つ。一部屋は空き部屋。

101号室

・直江三村宅

102号室

・比叡彩花宅

103号室

・会議室兼反省会会場

201号室

・直江幸成宅

202号室

・氷川優宅

203号室

・ロイ・カブラギ宅

血吸い人

帰宅を急ぐ少女が血吸い人に襲われて血を吸われたという都市伝説。

白狐

華景市に伝わる民間伝承。鬼を退治した白狐の話。白い狐の御面に白い着物の姿に刀を持った出で立ち。血吸い人から逃げ延びた人物の証言から明らかになった存在で不確定。また、ヘクセ、シュトレイゴイカバールとの関連性も不明。

1 - 5 : 放課後

ホームルームの終わりとともに高校の授業は終わった。

授業が終わり、帰れるという瞬間が高校生のみならず、全ての学生達には学校生活で最も幸せな瞬間ではないだろうか？

担任の話が終わり、挨拶を終えた幸成とロイはカバンを掴んだ。

言ってしまった彼らにとってここからが仕事であり、学校生活はターゲットである「神宮寺鳳寿」と接触しなければ意味が無い。

しかも学年が違うから会う確率は有っても、会話する確率は圧倒的に低い為、下手をすれば三年生に突入し、さらに下手をすれば卒業で、潜入の意味が無くなる。

なら、こちらから声を掛ければと思うかもしれないが、いきなり訳の分からない人物が声をかけたならそれこそ目立つ。

自然に、かつ確実に探りを掛けるなら、最終的に効率がいいのは「何かきっかけを手に入れてから接触し、信頼を勝ち取る」という事になる。

つまり、運任せ……

エージェントが聞いて呆れるが、現状は仕方ない為、接触出来るまではヘクセを狩るしかない。

「さて、帰るか」

幸成はカバンを掴み、肩に担ぐとロイは「ああ」と答える。

菜月の「変態さん」の一言が相当効いたらしい。

（そりゃ、あれだけストレートに言われれば無理は無いな）

ロイには悪いが良い薬にはなっただろう。

「幸成君、ロイ君、一緒に帰りませんか？」

そう声をかけたのは沙耶那だ。

沙耶那は相変わらず優しい笑みを湛えている。

どんな事をすれば怒りますか、と聞きたくなる程、笑顔が絶えない。それに容姿も合わさって、完璧な美少女だ。

そんな沙耶那の後ろにはロイの天敵に成り得る可能性を秘めた菜月が隠れていた。

まるで姉妹のような構図に思わず幸成も頬を緩ませる。

「幸成君達のお家って、確か雫荘ですよネ？」

「ええ」

「私の住んでる神社は雫荘の近くですから一緒に帰りましょう？」

「それなら是非」

幸成は笑みを見せると、不意に女子の目線が冷たくなった。

いつかの任務の時に、複数のヘクセに狙われた事があったのだが、その時感じた殺気に似ている。

（こ、ここは戦場か……？）

「行きましようか？」

「そうですね」

幸成は居心地の悪い殺気に身震いをするとうちを出た……

イヤホンから洩れる音楽に合わせて鼻唄を唄う優は弾薬を作っていた。

正確には改造していた。

机には拳銃弾が分解されている。

彼女のモットーは「古い技術を転用し、最新の物に」であり、今もそのモットーでHAWK専用弾薬を作っていた。

HAWK専用弾薬「9mmシャルデンプファー亜音速弾」は通常の拳銃弾「9mmパラベラム弾」を改造した優特製の弾薬だ。

HAWKは貧乏部隊。

その特性上、消耗品である「サプレッサー」は使えないのが現実。かと言って、隠密作戦を行う部隊が銃声を漏らす訳にもいかない。

実際、銃声は「発射ガスの爆発音」だけではない。

自動拳銃を例にとると、前述の爆発音に加えて、「スライドが動く機械音」と「発射された弾丸が音速に到達する時の衝撃音」^{ソニックブーム}が有る。スライドの機械音を消すにはスライドを手動にしなければならぬ。為、ヘクセ相手の火力不足は否めず、それは出来ない。

しかし、衝撃音と爆発音は消そうと思えば消せると優が豪語し、作ったのが「9mmシャルデンブファア亜音速弾」だ。

一般的に爆発音を消すのはサプレッサー、衝撃音は火薬を減らした亜音速弾の役割だが、それを弾薬に搭載したのがこの弾薬である。

そこで優が参考にしたのは旧ソ連が開発した消音弾薬「SP-4弾」だ。

この弾薬は弾丸の下にピストンが有り、そのピストンが無色火薬で撃ち出し、ピストンが弾丸を撃ち出す。

その時にピストンが薬莢に蓋をし、発射ガスを閉じ込めて音を消すという代物だ。

それを9mmパララム弾に仕込んだ物が9mmシャルデンブファア亜音速弾である。

無論、射程は落ちるがヘクセとの交戦は室内の、それも広くない空間が多い為、十分に通用する。

「よし、出来た！」

優はイヤホンを外し、音楽プレイヤーの電源を切ると作った弾薬を予め並べていた弾薬の列に並べた。

彼女はこの弾薬の他にも、古くなったコンピューターを再利用して様々な機器を作るといった事を成し得ている。

弾薬を一通り作り終えた優は背伸びをすると、弾薬を片付けながら時計を見た。

「もう4時過ぎたんだ。夕食を作らないと……」

夜間任務の為、夕食は早めに取り、胃を馴らすというのがHAWKの慣例である。

優はゆっくりと立ち上がると自分の部屋から出て、一階の空き部屋

――作戦室兼集会場に向かって階段を下りた。

と、道路に幸成とロイが歩いて来るのが見え、優が帰宅の挨拶をしようとして言葉を止める。

幸成とロイの後ろに女の子が二人。

それもとびつきりの美少女だ。

不意に三村の「彼女」という単語がリピートされた。

「優さん、ただいま」

幸成の声に優は棒読みで挨拶を返し、美少女を見る。

「この女の子達は？」

「初めまして、三神沙耶那です。こちらは友達の藤宮菜月ちゃんです」

「初めまして」

沙耶那と菜月は優に一礼すると笑顔を見せた。

菜月は優をまじまじと見ると口を開く。

「ユキ君のお兄さん？」

「幸成の『お姉さん』の氷川優です」

優は引き攣った笑みを見せると、「家の幸成とはどういった関係で？」と繋げる。

（家のつて、いつからあんたの実姉になった？）

幸成は苦笑いを浮かべると、沙耶那は動じず、笑顔で返した。

「私は幸成君のクラスの学級委員長で、二人がクラスに馴染めるように協力してあげています」

「そんな感じ。沙耶那さん、菜月さん、今日はありがとうございました」

幸成は一礼すると「どういたしまして」と返す。

これでは圧倒的に大人げないのが優で、大人の対応をしたのが沙耶那になってしまった。

「私達は今日はこれで失礼します」

沙耶那は一礼し、笑顔を見せると「また、明日」と付け足して歩いて行った。

その背中を幸成とロイが見送ると幸成は優を見る。

「優さん、さっきのはいくら何でも大人げないから」

「何で？」

「全体的に……」

幸成は溜息を漏らすと髪を掻きあげた。

この人は何故か女性絡みになると妙に大人げなくなる。

向きになるといつか、美少女なら険悪なムードに成り兼ねない。

自分が女の子に見られないから気にしているのか、と幸成は聞いた事があるが、「歌劇団みたいでカッコイイじゃん」と返した為、それは違うという事が分かった。

しかし、その向きになる理由が分からない。

ロイや彩花、三村は知っているらしいが教えてくれないから尚更もどかしい。

幸成は深い嘆息を漏らす。

「優さん、夕食を作る為に下りてきたんじゃないですか？」

「そうだった」

優は思い出したように呟くと、空き部屋に駆け込む。

「本当に何だろ？」

「お前って本当に鈍いな」

「何？」

「何でもねえよ」

ロイは呆れたように言い、部屋に向かって行く。

幸成は首を傾げると部屋に歩いて行った……

1 - 6 : 開戦

時計の針が19時を指した頃、パソコンのキーボードを叩いていたロイが背伸びをした。

パソコンの画面には「リンク完了」の文字が踊り、ロイは三村を呼ぶ。

「おっちゃん、衛星とのリンク終わったぜ」

「おう！」

三村は答えるとコーヒーを啜りながら、提供された偵察衛星「G A^ガ R U D A」のリンク画面を見る。

「今回、よく偵察衛星を米軍が貸してくれたものだ」

「それほど、米軍もシュトレイゴイカバールを危険視しているのだろう。ルーマニアに潜伏していたカズイクルを捕らえようとアジトに踏み込んだタスクフォースが皆殺しにあつたからな。どの部隊でもシュトレイゴイカバールを消してくればいいんだろう？」

三村はコーヒーを一気に飲み干し、流し台で食器を洗っている優にマグカップを手渡した。

優はマグカップを洗いながら自慢げに口を開く。

「まあ、ボクのフェロモンを視覚化する装置を米軍に提供したからって事もあるかもね」

その声に食後の紅茶を優雅に飲んでいた彩花が嘯く。

「でもお、ヘクセがフェロモンを使って仲間を認識するというのを突き止めたのはあ、ウチなんですよどねえ」

まさにその通りであつた。

比叡彩花はヘクセ研究においての第一人者であり、ヘクセがフェロモンを使い、仲間を見分けると突き止めたのは紛れも無い彼女の御蔭だ。

「とにかく、これで俺達はヘクセを楽に見付ける事が出来る。願ったり叶ったりじゃねえか？」

黒のカラーコンタクトを外し、紅い瞳を見せる幸成がロイのパソコンを覗き込む。

この紅い左の瞳は不気味な光を放つ。

ロイはそんな幸成を一瞥すると、エンターキーを押して衛星の映像を映し出す。

華景市の上空を映し出すその映像は鮮明とはいえないが地上の人間をハッキリと捉えている。

「お下がりに言っても意外に使えるじゃないか」

幸成が感心すると、ロイは苦笑いを浮かべ、嘆息を漏らす。

「アメリカ軍の偵察衛星の解析力はこんなもんじゃねえぞ？地面に置いたタバコの銘柄をも読み取れるからな」

「……完全に旧式だな」

幸成は頭を掻きながら、深い溜息をつき、近くにあった銀色のアタッシュケースを開けた。

アタッシュケースには四丁の拳銃とヘッドセット、刃渡り30cmのナイフが納められている。

それぞれの拳銃は二丁が銃口が二つ有るM92FS - エリートIA、もう一丁が銃口に銃のようなフックが取り付けられたM1911A1、もう一丁がグロック26だ。

それぞれが任務に必要な不可欠な物であり、対ヘクセ用拳銃、フックシヨット、麻酔銃となっている。

「調整は終わっているよ」

「相変わらず良い仕事してるよ」

幸成は手を手ぬぐいで拭いている優の肩をポンと叩く。

三村はその様子を見ると、声高に叫んだ。

「さて、搜索と参りますか。スカイアイ、フェロモン探索」

スカイアイ（ロイ）は文字通り空からの目を用いる。

フェロモン探索とはヘクセの出すフェロモンを視覚化し、人間とヘクセを区別する映像だ。

熱探知「サーマルビジョン」にも似ているその青い画像は人間はオ

レンジ色に表示されるが、ヘクセは緑色に表示される。

さらにヘクセの通った後に残留したフェロモンも探知する事が出来る為、ヘクセが通った跡が一目瞭然となるという訳だ。

このサーマルビジョンならぬ「Hexe Search Vision」、通称「HSV」はヘクセを探す部隊には必要不可欠なものである。

ロイは上空から映し出されるHSVを見ながら、驚嘆の声を漏らした。

「流石、夜間外出禁止令が出てるだけあるな。パトカーらしき車が沢山有る」

「ヘクセを狩るにもパトカーを避ける必要があるな……」

「そうですねえ。警察にもヘクセは極秘ですからあ、鉢合わせたら面倒ですものねえ」

彩花は人事のように呟きながら紅茶を啜り、それを飲み干す。

「しかし、奴らが動き出すとしたらあ、今日ですよお？」

「彩花さん、その根拠は？」

幸成は優雅に紅茶を嗜んでいる彩花に問い掛ける。

「敵はこちらの存在にまだ気付いていませんよねえ？と、言うことはですよお？人間の能力を凌駕しているヘクセが大胆不適になるのは必然ですよねえ？」

「確かに噂に成る程だからそれは有りえる。だが、夜間外出禁止令が出てる以上、獲物は……」

三村が目を細めると、ロイが怒鳴った。

「ヘクセを確認！！警察官が襲われている！？」

彩花は新しい紅茶にミルクとガムシロップを入れると、軽く首を傾げ、笑みを湛えつつ紅茶を飲む。

「場所を指定しろ！！」

「ポイントA3エックスレイ、ここから約4キロの地点ですよ！！」

ロイは華景市の地図と偵察衛星を照らし合わせながら怒鳴る。

「了解！！ロメオ、準備だ。自分は先に車を準備する。急げ！！」

「分かった」

幸成のコードネームであるロメオを口にした三村は部屋から飛び出し、幸成も黒い夜型迷彩を着込み、次々とホルスターを装着していく。

両腿のレッグホルスターに銃口が二つ着いたスライドがそれぞれ白と黒の拳銃、通称「スコトス&フォース」を仕舞い、ヒップホルスターにフックショット「ドルヒボーレン」、脇に仕舞うシヨルダーホルスターには麻醉銃「ミューデトラウム」、腰にナイフを指し、最後にヘッドセットを右耳に取り付けた。

「さあ、ミッションスターだ」

装備：HAWK（前書き）

HAWKの装備。

お粗末ながら使われた武器を解説。

クリス・スーパード

反動を後ろではなく下に逃がす事で銃の跳ね上がりを軽くしたサブマシンガン。

M90two

「ベレッタ M92FS」の最新型。弾倉のバネをショート化する事により、装弾数を従来の15発から17発に増やした拳銃。

グロック 17

強化プラスチックを用いる事で軽量化に成功した、映画にも度々登

場する有名な拳銃。

装備：HAWK

HAWK-EYE

通称

「フューラー」

ヘッドセットに右目に掛かるヘッドアップディスプレイ（HUD）を装着した戦略情報機器。HUDには敵対者の情報を映し出す。また、微妙な筋肉の動きから次の行動を予測してそこから予想される動きも投影される。さらに、フェロモンの視覚化、暗視機能、望遠機能が搭載されている。意味はドイツ語で「探知器」

M92-HAWK DUAL

装弾数：18+2

使用弾：9mmシャルデンブファアー亜音速弾

愛称：スコトス&フォース

対ヘクセ用主力火器。外観は「M92FS-エリートIA」だが性能は上位互換とも言える銃。装弾数は弾倉のバネをショート化するという「M90two」を参考にして、反動はサブマシンガン「クリス・スーパード」と同様のスライダーで相殺する事で両手でも通常に扱えるように、さらに銃身長を伸ばし、競技用の拳銃並の高い命中率を誇る等の高性能を有している。また、グロック17同様ポ

リマーで出来ている為、弾丸抜きで900gと軽い。銃口は上下二連装となり、射撃と同時に二発の弾丸を発射し、対象に対して致命的な「流体性力学的ショック」を引き起こしやすい。また、マウントレールも搭載され、HAWK-EYEに連動する特殊なレーザーサイトも搭載している。フルオート射撃も可能で前述の反動相殺機構に加え、発射間隔を抑えており、操作しやすくしている。右手に黒い拳銃「スコトス」、左手に白い拳銃「フォース」を使う。スコトス&フォースはギリシャ語で「闇と光」を意味する。

HAWK - NAIL

刃渡り：35cm

通称

「メツサードルヒ」

HAWK正式採用のコンバットナイフ。長さから鉈や小太刀に近い。刺突や切り付けの両方に特化しており、刺突時には強力な電流を流す。ドイツ語で「短剣+ダガー」を意味する。

HAWK - BILL

ワイヤー：30 m

限界重量：120 kg

通称

「ドルヒボーレン」

小型のフックショット。先端が鋭利な鉤のようになっており、紐は強靱で蜘蛛の糸を参考にし、少しの事では切れない。移動用や敵を引き寄せる等、用途は多様。ドイツ語で「貫通する」を意味する。

9 mm シャルデンプファー 亜音速弾

9 mm パラベラム弾自体に SP-4 弾のようなガス密閉構造を設け、火薬を減らして亜音速弾にした物。射程距離は多少落ちるものの、高い消音効果を発揮し、その音は 45 デシベル程度（電話機のベル）
。サプレッサーが使えない HAWK で重宝されている。

GARUDA

読みは「ガルダー」。HAWK が使用する軍事偵察衛星。アメリカ軍からのお下がりであり、旧式の物。カメラにはヘクセの発するフエロモンを視覚化する機能が搭載されている。

9mmパラライズ弾

世界初の対人麻醉弾。弾頭は蚊の針を参考にした小さい針でそこから成分がサクシニルコリンに似た薬品を注入する。また、通常の弾薬より少ない火薬が特徴。刺さった標的は筋弛緩を引き起こし、体を麻痺させる。対人麻醉は薬品の量で死に至る為に使われていなかったが、致死量の直前になると成分が体内分解する薬品が使われている。

グロック26 - HAWK

装弾数：10+1

使用弾：9mmパラライズ弾

愛称：ミューデトラウム

「グロック26」のHAWKモデル。外観はグロック26だが、使用弾薬は9mmパラライズ弾を使用し、民間人の排除やヘクセの捕獲・保護に用いられる。サプレッサーを取り付けられ、ヒップホルスターに仕舞われる。愛称の「ミューデトラウム」はドイツ語で「眠い夢」を意味する。

アルムブレスト

装弾数：1

ワイヤー：75 m

限界重量：180 kg

クロスボウ。矢にワイヤーが取り付けられている。理由としては貧乏部隊であり、矢を無駄にしない為という理由とヘクセの足を止めるという理由。6倍率スコープが取り付けられ、逃げるヘクセに対して用いられる。基本的に車に積まれている。意味はドイツ語で「石弓」

1 - 7 : 追撃

街灯のオレンジ色の光とパトカーの赤い光が周囲を照らす。

まだ日が短いこの地域の夜は早い。

この時間には闇に包まれる。

東京等とは違い、田舎であり、さらに夜間外出禁止令が出ている為、20時に成らずともスーパーは閉まり、24時間営業を売りにしているコンビニすらも閉まっていた。

市民は家の中に逃げ込み、本当の化け物――現に化け物ではあるのだが――に怯え、家の明かりは消えている。

まるで昭和の、第二次大戦中の空襲から避ける様子に似ていた。

警官達はパトロールを行い、「血吸い人」を警戒しているのは1979年に流布した有名な都市伝説「口裂け女」以来だろう。

「しかし、何もありませんね、金田さん」

若い警官は金田と呼んだ中年の警官に呟くと、助手席で背もたれに寄り掛かっていた金田がハハッと笑った。

「まったく、警官をこんな事で使わないで欲しいな。お前もそう思うだろ、木村」

「そうですね」

パトカーを運転していた木村が車を商店街の方に向けると、背中を向けた黒いローブの男が目の前にいた。

それに気付いた木村は慌ててブレーキを踏み、車を急停止させる。

金田は血相を変えて、助手席から飛び出し怒鳴った。

「おい、君！！旅行者か！？今は夜間外出禁止令が出ている」

男はこちらを振り向かない。

ただ、背を向けて遠くを眺めている。

「聞いているのか、君！？」

金田が男の肩を掴むと、腹に……

金田の腹に鋭い激痛が走った。

激痛というにはあまりにも複雑で、内臓を掻き乱されるというにはあまりにも安直で……

「……っあ……っはかあ……」

「痛い？痛いよね？内臓を刃物で掻き乱されて、骨を砕かれて……」男は体を前屈みにして呻く金田の耳元に呟き、問い掛けると金田の腹から滝のように溢れてくる血を飲み込む。

「うわああああ……」

木村は絶叫すると車をバックさせた。

彼の本能が逃げると叫ぶ。

その本能に素直に従った木村はアクセルを踏み込み、商店街から遠ざかる。

あれが血吸い人？

だとしたら、自分も……

「死にたくない……死にたくない、死にたくない！死にたくない！

！死ぬのは嫌だ……」

木村は絶叫し、アクセルを踏みつづける。

スピードメーターは100キロをゆうに超えていた。

赤信号を無視してでも逃げなければならない。

……しかし……

バックミラーには先程の男が映っていた。

100キロを超えるパトカーに人間が着いて来れるはずはない。

だが……

パトカーの上に何かが乗る音が響き渡り、バックミラーから男が消えた。

「嘘だろ！？おい、嘘だ……」

屋根の上から刃が下り、木村の延髄から突き刺さったその刃が、木村の声を途中で途切れさせた。

100キロを越えたパトカーは凄まじい勢いでスリップし、パトカーはガードレールに衝突し、停止する……

路上を走る黒いワゴンの電気自動車。

無音のそれは闇に紛れて、街を走る。

黒いワゴン車の中の助手席に座っていた幸成のHAWK専用のヘッドセット「HAWK-EYE フューラー」からロイの声が聞こえてきた。

（こちらスカイアイ！新たに警官二人が殺害された。目標は近接戦に特化している模様、オーバー）

ヘクセの戦闘系統はそれぞれは三種類ある。

近距離特化型、遠距離戦特化型、特殊能力特化型の三種類だ。

ヘクセとは言っても武器を使う者もいる。

剣や槍、拳銃や突撃銃等を使うヘクセもいるのだ。

今回はロイの報告から近距離特化と言っているが、実際、特殊能力特化型かもしれない。

と、言うのも特殊能力特化型は超自然的な能力、例えば雷等を操るが、常にそれらを操る訳ではなく、何かしら武器を交えた戦闘を展開する。

つまり、警官を殺害する際に能力を使わなかった可能性も考えられる。

「こちらロメオ、了解した。敵との距離を教えてください、オーバー」

（次の角を左に曲がればすぐ見えるはずだ、オーバー）

「了解。何か有り次第、随時、敵の情報を入れてくれ、オーバー」
（分かった。スカイアイ、アウト）

ロイからの無線が切れると幸成は車の後部席に置いていたクロスボウを掴んだ。

クロスボウの矢にはワイヤーが括り付けられている。

どちらかと言えばクロスボウと言うには遠く、鯨の捕獲に使われる

ハーブーンに近いそれはHAWK隊員からは「アルムブレスト」と呼ばれていた。

アルムブレストはワイヤーで敵の動きを止めるばかりか、銃痕が付けられない屋外の戦闘に用いられる。

アルムブレストに6倍率スコープを取り付けると、ワゴン車の天窓から身を乗り出した。

「One shot one kill」、一撃必殺を意味する狙^ス撃手の金言は、クロスボウにも当て嵌まる。

実際、クロスボウは1970年代、銃が高性能の消音装置を得るまで特殊部隊で使われていた。

貧乏部隊には持つてこいの武器だ。

「It's show time!!（ショーの時間だぜ）」

幸成ほくそ笑むと右目に掛かるHUDを「Hexe Search Vision」、通称「HSV」に切り替え、赤眼を閉じ、右目に集中する。

サーマルビジョンに似た風景がHUDに映し出され、同時に車が角を曲がった。

パトカーの上に乗っている緑色に映し出される人間がHUDに捉えられ、幸成は赤眼を開ける。

普通の光景とサーマルビジョンが合わさり、奇妙な風景になった。例えるなら、昔の青と赤のフィルムが取り付けられた3D眼鏡をかけているのに似ている混ざり方だ。

左目でアルムブレストのスコープを覗き込み、ヘクセと思われる男を中心に捉える。

男の両手には、インドのマラータ族が使っていた、箆手の先から70cm程の剣が伸びた防具「パタ」が握られていた。

幸成はゆつくりと引き金を絞ると、男に向かって矢を放つ。

矢が真っ直ぐと男に向かい、ワイヤーが擦れる音が響き渡る。

唯一、消音性を欠く要素がこのワイヤーだ。

が、しかし、矢を現場に残す訳にいかず、ましてや撃った矢をご丁

寧に回収していたらヘクセに逃げられるから仕方ない。

矢が男に当たる瞬間、男は矢に気付き、それを弾いた。

空中に弾かれた矢はワイヤーの限界の長さを越えてアルムブレストに巻き取られる。

男はこちらに睨むと、パトカーからパタを引き抜き、駆け出して行く。

幸成は巻き取られて戻ってきた矢を掴むと三村に叫ぶ。

「おっちゃん！！早くしろ！！」

「分かってるよ！」

三村はアクセルを踏み込み、男の後ろを追跡する。

幸成はHUDを通常のモードである「Lock&Load」に切り替えた。

このモードは「敵を捉える（Lock）」と、敵の筋肉の微妙な動きから次の動きを導き出し、「HUDに映し出す（Load）」というビジョンであり、通称「LAV」と呼ばれている。

風を切って走る男をHUDに捉えた幸成は再びアルムブレストの弦を引っ張り、そこに矢を装填した。

「おっちゃん、奴の後ろに張り付いてくれ」

「分かってる！」

三村が怒鳴るのを聞き、幸成はスコープを覗く。

手ブレと車の揺れ、さらに男の不規則かつ俊敏な動きはHUDに映し出される予想された動きと一緒にあるのだが、矢が直撃するまでの時間を考えれば間に合わない。

スナイパーライフルでもあればまだマシだったかもしれないと幸成は舌打ちをし、一射目で弾かれた事を憎む。

男が人間には有り得ない速度で街の角を曲がり、車もドリフトしながら曲がった。

タイヤから白煙が巻き上がる。

（こちらスカイアイ！ロメオ、聞こえるか？まずいぞ！！）

「どうした！？」

（次の角に警官がいる！！何とかして止める！）

「簡単に言っな！」

（方向を変えるだけでいい！）

「……分かった、やってみる。ロメオ、アウト」

幸成はアルムブレストからホルスターの拳銃型フックショット「HAWK - B I L L ドルヒボーレン」に持ち替える。

次の角まで約100m……

「おっちゃん、奴の10mまで近付いてくれ」

「分かった！」

三村はアクセルを一気に踏み込むと、男の後ろの手前、15mまで近付いた。

もう少し……

残り5m……4……3……2……1……

幸成はフックショット「ドルヒボーレン」を構えると、男の数メートル手前に撃ち込み、ワイヤーの巻き取りでそこに引っ張られる。移動用のフックショットであるドルヒボーレンには自分を移動させる程の力をモーターに出させる「ハイパワー」と物を引き寄せる程度の力の「ノーマル」があり、この強靱で有名な蜘蛛の糸を参考に作られたワイヤーは幸成の体を支えるには充分だった。

刹那、空中を舞う幸成の目の端に何か白い物が映り、そちらの方を見た幸成は言葉を失う。

路地の建物と建物の隙間に、白い着物と太刀を持ち、白い狐の面を付けた人物が立っているのだ……

その一瞬の出来事がスローモーションのように思えた瞬間、幸成の時間が元に戻り、ワイヤーに引っ張られる。

幸成はすぐに集中すると、ワイヤーが巻き取りを終えて男のすぐ手前に幸成は立つ。

即座にナイフ「HAWK - N A I L メッサードルヒ」を構えると、男は大型のスーパールの方を向くとその屋上に跳んだ。

その高さは約25m、ドルヒボーレンでギリギリ届く距離だ。

幸成はドルヒボーレンの銃口を屋上に向けると、ワイヤーを発射し、手摺りに巻き付け、ワイヤーに引っ張られる。ワイヤーが巻き取られて、その長さが限界まで短くなるより早く幸成は手摺りを掴み、屋上に降り立った……

1 - 8 : 赤眼の狼

対峙する二人。

まだ薄い月明かりで照らされる二人の姿は片方は人間に見えず、逆に片方は人間にしか見えない。

紅い瞳の少年と黒いローブの男はそれぞれの武器を手に持っていた。少年は上下二連装の二丁拳銃と男はパタを持っている。

一陣の風が吹き、男のローブが脱げた。

男は痩せ型で目が細く、髪は無い。

パタを下に下ろした男は口を開いた

「君の名前を聞かせてもらおうか？」

幸成は無表情になりながら小さく「ロメオ」とだけ答えた。

「コードネームか？まあ、いい。僕はディック・チャンバー。シュトレイゴイカバールのヘクセだ」

シュトレイゴイカバールのヘクセの文字を聞いた幸成は眉をピクリと動かす。

「今まではぐれヘクセを狩ってきたが、シュトレイゴイカバールのヘクセと対峙するのは初めてだ」

「そうか……なら、これが初めて最後だっ！！」

チャンバーはパタを両手に凄まじい速度で幸成に駆ける。

風を切る音が響き渡り、幸成はチャンバーの頭を飛び越えてそれを避けた。

「凄い身体能力だ」

チャンバーが笑うと、幸成はスコトス&フォースの引き金を引いた。放たれる9mmSD弾をチャンバーが、まるで漫画かアニメにあるような動きで弾丸を自分から逸らしていく。

「あまい！！」

チャンバーは怒鳴ると、パタを交差させながら幸成に向かっていき、振り下ろす。

同時に金属の澄んだ音が響き渡り、幸成はナイフ「メッサードルヒ」でその二本を受け止めた。

飛び散る火花が二人の顔を照らす。

二つの手を添えたナイフで受け止めたパタの重圧は凄まじい。

「これは刺さると痛いよ?」

チャンバーはニヤリと笑い、片方のパタでナイフを押さえながら、もう片方を後ろに引く。

この後、刺突が来ると分かっているがナイフに添えている手を離し、片方で拳銃を使うにしても、ヘクセの力を片手で支えられるとは思わない。

幸成は舌打ちをすると顔面に突き出された刃を顔を横にして避ける。鮮やかな血が幸成の頬とパタを濡らした。

幸成の血をパタから舐め取り、不気味な笑みを見せる。

今度は横に振りかぶり、パタが一閃された。

幸成はナイフから力を抜き、逆に押さえ付けられる事で横に一閃されたパタを避ける。

パタは幸成の髪の前を少し切り、それとは別に空を切った。

先程の押さえ付けられた反動を利用し、上手くかい潜った幸成は再び拳銃を構える。

微かな銃声と同時に放たれる弾丸はまたしてもチャンバーのパタで弾く……

「無駄だよ? 無駄、無駄!!」

チャンバーは怒鳴ると、冷静な幸成に問い掛ける。

「君は何でそんなに冷静なの? 今から死ぬのが分かっているからかな?」

「逆だ」

幸成は鼻で笑うと二丁拳銃の弾倉を交換し、銃を交差させる。

「どうやって?」

「お前は致命的な事に気付いていない」

「何が?」

チャンバーが問い掛けると幸成は弾丸を発射した。

三度、次々放たれる弾丸を弾いたチャンバーは腕に走る激痛に顔を歪める。

チャンバーの腕からは真紅の血液がパタの付け根から滴り落ちてきた。

「何だ！？何なんだ、一体！？」

「お前は馬鹿だな。その武器は戦場で落とす事は無いが、同時に離す事も出来ない。つまり、下手をすれば自分の腕を痛めるという事だ。そんな武器で弾丸を弾けば常識的にそうなるだろ？ Reach
！！」

幸成は怒鳴ると、二丁拳銃を連射しながら距離を詰める。

チャンバーは無謀にも血の滴るパタで応戦するが、数発防ぎ切れず、体に弾丸が届く。

幸成が弾倉を交換すると同時にチャンバーはヤケクソに切り掛かるが、腕を痛め、速度が落ちたパタを避けるには容易で、ましてやHUDの予測された動きの通りのチャンバーは遊ばれている状況だった。

「この下等な人間が！！」

「下等な人間にやられてるお前は何だ？」

幸成はほくそ笑むと二丁拳銃をチャンバーの体に押し付けた。

「Bingo！！」

フルオートで吐き出された弾丸は一瞬でチャンバーの体を蜂の巣に変え、弾き飛ばされた。

弾かれたチャンバーに銃口を突き付ける幸成の姿は月光に照らされ、不気味な赤を醸し出している。

「化け物め……」

「吸血鬼に言われるとは心外だぜ」

幸成は右手で拳銃を構えながら、左手で先程、頬に付いた傷痕を擦る。

傷は既に塞がり、ただ、固まっていない血液が手を濡らしたただけだ

った。

「ああ、確かに俺は化け物かもしれないな」

幸成は自嘲すると、幸成は「良いことを教えてやるよ」と呟く。

「古来、吸血鬼を滅ぼすには六つの方法がある」

そう言くと、幸成は左手の指を広げていく。

「一つ、遺体を火葬する。二つ、水に沈める。三つ、心臓を取り出す。四つ、心臓に杭を打ち込む。五つ、首を切り落とす……」

そこまで言くと、五つ目で開いた手を握った。

「六つ目は狼に襲わせる。名前を知りたがっていたな？俺は赤眼の狼。貴様ら吸血鬼は俺が全員喰らってやる！！」

幸成はその冷たく、残酷な赤い瞳で男を見下ろすと、ゆっくりと引き金を数回引いた。

静かな弾丸は男の頭を粉々に粉碎し、周囲に赤黒いミンチを撒き散らす。

同時に男は衣服や武器を残し、その男がこの世にいた全てを消し去った……

登場人物：華景高校（前書き）

登場人物：華景高校

登場人物：華景高校

三神 沙耶那（17）

一人称「私」。華景高校二年生。容姿端麗、スポーツ万能、成績優秀の万能美少女。うなじが隠れる程のセミショートで、墨を流したような美しい黒髪、前髪の両側を一房に髪を留め、前に垂らしている。身長は162cm、二重瞼で目鼻が整い、唇もみずみずしい。Eカップとスタイルも良く完璧とも言える美少女。天然ボケだが、基本的に面倒見のいい女の子。三神神社に住んでいる。

藤宮 菜月（17）

一人称「ナツ」。華景高校二年生。薄い茶髪に右側のサイドテールに、前髪は自然な感じ、童顔で149cmと背が低く、よく子供に間違われる。Bカップ。笑うと口から八重歯が覗く。明るい性格で子供っぽい。ロイとの仲は最悪。沙耶那とは「サヤ」と「ナツ」と呼び合う仲。趣味は園芸で花を育てる事が好き。毎日スポーツドリンクを飲んでいる。

神宮寺 鳳寿（16）

一人称「アタシ」。華景高校一年生。褐色のストレートヘアでセミロングのボブカットに右の前髪部分に髪留め、可愛い顔立ちで赤縁の眼鏡をかけている。Cカップ。身長は158cm。HAWKの監視対象者。

2 - 1 : 二日目 (前書き)

第2話

2 - 1 : 二日目

カーテンから零れ出る太陽の光が幸成の顔に触れる。

その優しい光が幸成の顔を照らし、幸成はゆつくりと目を開けた。目を開けて初めて実感出来る、生きているという実感。

ヘクセという有り得ない存在と戦ってから朝を迎えると、いつもの実感に苛まれる。

幸成は髪を掻き上げると布団から出て、洗面台に立つ。

夜に付いた、あの傷は跡が残らずに消えていた。

掠ったとは言っても、一日で消えるような浅い物ではない。

化け物……

チャンバーの言葉が頭の中で響き渡り、幸成は舌打ちをした。

皮肉にも化け物に言われるとはな……

自嘲した幸成は紅い瞳にコンタクトレンズを入れた。

この瞳が無くなれば、俺は……

「起きてるか？」

朝から元気なロイの声が部屋に響き渡り、「ああ」と答えて顔を覗かせる。

「二日目だな……彼女出来るかな……」

「……諦める、お前には無理だ」

幸成がまさに諦めるといった風に肩を叩く。

「な、えっ！？何、その宣言！余命宣告？それとも死刑宣告なのか！？」

「冗談だよ、冗談」

幸成は呆然とするロイに笑いかけると、不意に昨日の夜のある出来事が甦った。

フックショット「ドルヒーレン」のワイヤーで移動している時に見た、沙耶那と菜月から語られた「白狐」。

白い着物に太刀、白狐の御面の人物。

あれは？

「ロイ……」

「どうした？」

「……昨日、俺とおっちゃんを追跡している時に他にヘクセがいなかったか？」

「それは無い。あんな開けた所に別のヘクセがいたら、いくら素人でも気付くだろう？」

「いや、例えば路地裏とかは？」

「路地裏か……ただでさえ解析力が低いGARUDAなのにHSVじゃ、ますます探せねえよ」

ロイの言う通りだった。

サーマルビジョンに酷似した視界では路地裏等を探すには難しい。青く染まり、さらに路地裏は深い青に染まったその視界から探すのは不可能という物だ。

「何があつた、幸成？」

「信じねえかもしれないが……白狐を見た」

「白狐って……冗談だろ？」

「俺だつて冗談だと思うから聞いてんだ。伝承の存在が見えたんだから……」

「一応、録画はしているから後で確認だ」

「悪いな」

幸成は感謝すると、下から彩花の気の抜けた声が聞こえ、朝食だと告げた……

食後は何故か紅茶と決められたHAWK隊員。
無論、決めたのは彩花だ。

実際、このメンバーで力関係図を構築した場合、彩花が頂点となる。HAWK隊員の見解は一定しており、「彩花を怒らせたら毒を盛られそう」や「恐竜の絶滅の原因は実はこの人を怒らせたから」、さらには「人類が全滅する可能性はこの人を怒らせない限り皆無」とまで言われている人物だ。

五人はそれぞれ思い思いに紅茶を飲み、朝を満喫する。

「それにしてもお、いきなりシュトレイゴイカバル所属のヘクセを倒せるとは運が良かったですよねぇ」

彩花は薄紅色の紅茶の香りを楽しみながら微笑む。

その様子はやはりお嬢様にしか見えない。

あのような事を言われているとは思えない優雅な様子は、ギャップが有りすぎてこちらが困る。

「だが、何か誘っている感じがしたな……あそこまで大胆にシュトレイゴイカバルが動くとは思えないしなあ」

三村はレモンティーを啜りながら呟くと、つくづくコーヒーが飲みたいと思う。

幸成もコーヒーに、ではなく先程の呟きに同意した。

「確かにそうだな。まだ、はぐれヘクセ供の方がしつかりと隠れていたからな」

「何らかの組織の意図を感じられるというか、そんな感じだよな？」

ボクは雑魚を囷にしてこちらの戦力を観察したって感じたな」

戦力の観察？

という事は白狐はシュトレイゴイカバルのヘクセか？

幸成が白狐を頭の中で反芻させていたその時、扉をノックする音が聞こえ思考を止めた。

「はい、今出ます」

三村はレモンティーを一気に飲み干すと扉に向かって歩き、ドアノブを回した。

ドアの向こうに立っていたのはセーラー服に身を包んだ可憐な美少女と小柄で可愛い少女だ。

「あれ？可愛らしいお嬢さん方だ」

その覚えのある声を聞いて幸成は三村の隙間から顔を覗かせる。
やはり、とても言うべきだろうか？

沙耶那と菜月がドアの前に立っていた。

向こうもこちらに気付き、軽く会釈する。

「初めまして、三神沙耶那、こちらは友人の藤宮菜月です」

「こりやまた、ご丁寧に……自分は幸成の保護者の直江三村。よろしく」

三村は頭に手を当てると頭を下げると、ニヤニヤしながら幸成を一瞥する。

「何だ、幸成？もう彼女が出来たのか？」

「違うよ」

幸成は即座に否定すると紅茶を飲み干し、立ち上がる。

「沙耶那さん、菜月さん。紅茶でも飲んでゆつくりしていつて下さい。俺は今から歯を磨きますから」

「では、お言葉に甘えて休ませてもらいます」

「そうだね！モーニングティーって言うの？憧れてたんだよね」

「どちらかと言えばあ、アフターディナーティーですね。アーリーモーニングティーは朝食前の寝覚めのお茶、そして本当のモーニングティーのイレブンシスはあ、その名の通り11時前の飲みますう。初めましてえ、比叡彩花ですう。二人の姉とも思ってくださいいねえ」

彩花はマグカップに二人の飲む紅茶を入れながら間の抜けた声で笑う。

相変わらずというべきか、手際がいい。

「ゆつくりしていつてくださいいねえ」

彩花はそう言って二人にお茶を差し出した……

2 - 2 : 学校へ

ブレザーに着替え終えた二人はそれぞれの部屋の鍵を開めると零荘の階段を下り、HAWK隊員の集会所として使われている「103号室」の扉を開けて挨拶をした。

「行ってくる」

幸成の声に三村は「行つてらっしゃい」と答えた。

傍目から見れば仲の良い住人達にしか見えない。

仕事仲間と伝えているからそれも違和感無いだろう。

四人が学校へ歩いていると沙耶那が口を開いた。

沙耶那からほのかにアールグレイの独特の心地の良い香りが漂い、幸成は頬を緩ませる。

「最初、幸成君のお父さん見た時ビックリしましたよ。幸成君達の声が聞こえるからノックしたら凄く大きな人が出て来たんですから」「そうだね。でも、何か全然似てないね？幸成君ってお母さん似？」返答に困る質問だ、と幸成は苦笑いを浮かべてしまう。

HAWK隊員の素性はそれぞれが殆ど知らない。

軽口をたたき合う二人でさえ、何故HAWKに入ったのか分からないのだ。

「……俺には母親と過ごした記憶が無いんだ」

元々捨て子で施設にいたとは言えなかった幸成は自嘲しながら呟いた。

無論、二人は申し訳なさそうに表情を歪ませる。

それを見た幸成は「気にしないでいいから」と笑って見せる。

二人は分かったと笑みを見せるもやはり申し訳なさそうだという表情は変わらない。

「それよりさあ」と切り出したのはロイだ。

こういう時には非常に役に立つ……もつとも任務の時は今以上に役に立つのではあるのだが……ロイは話の転換には最適な人物だ。

「ここってどんな祭りがあるんだ？」

大方、飛び出すのは女の子の話かと思っていた幸成は、肩透かしとでも言うべきか、僅かに感心する。

「華景市には二つの祭りが有ります。明日の三日間の連休にこの街で桜祭りという物が開かれます」

桜祭りと言っても、桜の木には芽しか生えていないが……

幸成は季節外れだと思ったのが聞こえたのか分らなかったが、沙耶那は笑みを浮かべながら続ける。

「桜祭りと言っても花見のような物ではなく、桜の花が咲く事を願う為の祭りです。昔の風習と言いますか、儀式のような物ですね。

勿論、一日目は私の神社で舞が披露され、二日目からは露店が並びます」

「サヤの踊りって凄いなだよ？優雅って言うのかな？巫女装束着てさ！時代劇のお姫様が巫女さんがやるような踊りをサヤがやるんだよ」

「それは凄いな。明日が楽しみだよ」

幸成は沙耶那に笑いかけると、沙耶那は恥ずかしそうに顔を赤くした。

その可愛らしい様子に幸成は思わずときめく。

（何か、可愛いな……）

沙耶那はスタイルもいいし、アイドルのようで美少女というに相応しい。

そもそも、幸成は同年代の女性と触れ合った事がなく、恋という経験をしたことが無い。

それもあり、初めての感情に幸成は戸惑う。

「それでもう一つのお祭りというのが夏祭りです。これは盆踊りが行われ、露店並びます。これは街全体が一丸となりますのでとにかく面白いお祭りですよ」

沙耶那は優しく微笑むと幸成は空を見上げた。

この街はこんなに良い街なのに……

古い教会に集まった6人の男女。

男女はそれぞれ机に向かい、話し合っていた。

会議の張り詰めた雰囲気や談笑といった空気ではなく、緊迫した空気がだ。

「……やはり、ディック・チャンバーは死んだか」

「所詮、奴はこの程度だったのよ」

「御蔭で敵の戦力を知る事が出来ました」

「へっ！たかがガキが一人だろ！？俺が片付けてやろうか？」

「……焦る……駄目……」

「そうですね。私の放った『虫』も動いてますわ」

「チッ！」

男は舌打ちをし、机に足を乗せた。

「我々にはまだまだ時間がある。焦る事はないさ」

リーダー格の男は引き攣った不気味な笑みを見せる。

「それぞれの力を私は信用している。勝利をこの手に！」

男は教会に響く大きな声で怒鳴ると、それぞれが立ち上がった。

「全ては貴方の為に、ツエペシュ様！」

男女はリーダー格の男の名前を呼ぶと一礼したのだった……

2 - 3 : 接触

学校に着いた幸成達は昇降口の下駄箱に向かった。

それぞれの下駄箱は三年間使う下駄箱であり、変わる事はない。

幸成とロイは上履きを履くと、靴を入れる為に下駄箱を開けた。

「じゃ、行こう！」

菜月が子供のように無邪気な笑みを見せると沙耶那も笑みで答える。
靴を入れたロイが何故か固まっている幸成を見る。

「どうした、幸成？」

「……これなんだが……」

固まり、困惑する幸成は下駄箱から三枚の手紙を取り出し、ロイに見せた。

ハート形のシールで封をしているものやピンクの手紙、ルーズリーフを折り畳んでペンで装飾した手紙と様々だ。

「何だ……これは？不幸の手紙か？」

「貴様！モテやがって！！何なんだ！！？」

「知らねえよ！！！」

騒いでいた幸成とロイに気付き、沙耶那と菜月が二人に駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

「コイツ、いきなりラブレターもらってやがる！畜生！！羨ましいぜ」

「変態さんには無縁だもんね」

菜月は相変わらずのアイデンティティクラッシュ技術でロイを撃沈させる。

この子に一級アイデンティティ破壊師の称号を与えてあげたい。

幸成は苦笑いを浮かべると手っ取り早いルーズリーフを開き、読み上げた。

「いきなり手紙を書いてごめんなさい。私、直江先輩と手紙交換し

たいの……一年C組米山麗奈か……困るな、こっぴどいの……」

「……お前、露骨に酷いな」

「は？」

「普通、そういうのはこっぴどい読む物だぞ？」

「そうなのか？それは可哀相な事をしたな……」

どちらかという天然だが、犯した自分の非は認めるのが彼の良い所だ。

幸成はカバンにラブレターを仕舞うと深い溜息を漏らす。

正直、馴れない物だと幸成は自嘲を浮かべる。

「幸成、その返事はどうするんだ？」

「そつだな……」

幸成が考えようとしたその時、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

「一先ず行きましょう？」

「そうですね」

沙耶那の声に幸成は答え、歩き出し、角を曲がったその時だった。

凄まじい勢いで弾かれ、幸成は地面に尻餅を着く。

いくら訓練をした彼でも咄嗟の衝撃に耐える術は無い。

幸成が顔を上げると倒れていた少女も顔を上げた。

ストレートヘアのセミロングの髪をボブカットにし、右の前髪の一部を髪留めで止めている。

また、少女の顔は愛らしく、赤縁の眼鏡がアクセントになり、非常に可愛い。

この子は……

「君は……」

「……」

少女は謝るでも無く、廊下を駆けて行った。

と、少女が倒れていた場所には学生証が落ちている。

幸成は埃の付いたスポンを払うと学生証を拾い、開いた。

やはり、とでも言うべきだろうか。

二日目にして早くも接触が出来たのは非常に運が良かったとも言え

るだろう。

1年C組、神宮寺鳳寿^{じんぐうじほうじゅ}。

HAWKの監視対象者である鳳寿と接触する機会が与えられた事は久しぶりに嬉しい事だとも言えた。

「危ないなあ！！廊下は走っちゃいけないのに！！」

菜月は子供のように怒る。

本当に子供らしいその様子は非常に心和み、とても高校生とは思えない。

「何か急いでいたのでしょうか？幸成君、大丈夫ですか？」

「はい。取り敢えず、一時限目が終わったら返しに行こうかと……」

「あれ？言いませんでしたか？今日は二年生全クラス合同で体力テストが行われるので昼休みまで暇は有りませんよ？」

言っただけですよ、沙耶那さん……

この人はしっかりとっているようで、時折何処か抜けている。

そして、やはりタイミングが悪いのはお約束なのか？

タイミングが悪い以前に、お世辞にも運動神経があまり良くないロイはそれこそ死刑宣告を受けたようだった。

学生の方に経験が有る人がいるだろうが、シャトルランや反復横跳び等の体力を著しく使う競技は鬱だろう。

しかも新学期早々、ましてや午前中全てとなると、運動神経の悪いロイには絶望だ。

「腹痛くなってきた」

「急に何言っただ、ロイ？」

「授業が無いだけいいじゃないですか？」

沙耶那のはほんと笑うと、ロイもいつも程ではないが嬉しそうな笑みを見せた。

「おい！お前達！もうすぐ本鈴が鳴るぞ！！教室に入れ」

職員室から歩いてきた職員が騒いでいた四人に注意をすると、本鈴が鳴り響く。

それを聞いた四人は慌てて教室に駆けて行った……

2 - 4 : 体力テスト

時計の針が11時を周り、小腹を空かせ始める時間帯。

その時間帯は早弁をして空腹を満たす人が多いだろうが、今日の華景高校は違った。

学生達が空腹さえも忘れる出来事が起きていたのだ。学生達は体育館に集まり、一人の生徒に注目していた。

その一人の生徒は言うまでもない幸成だ。

幸成は華景高校で行われた体力テスト行った全ての種目の記録を大幅に塗り替え、その様子を見ようと生徒達が集まっていた。

元々自衛隊の訓練で体を鍛え、体力徽章を有する幸成にとって、この程度の事はハッキリ言って造作もない。

そして今は20mシャトルランの最中だ。

20mシャトルランは、20mを特定の音楽が鳴り終わるまでにたどり着き、それを体力が続くまで繰り返し返す競技だ。

二回連続でミスをしたらその場で終了となり、さらに回数が増える事に音楽の速さが増す。

正直、体力の無い人物には厳しいであろう種目を幸成は涼しい顔で、180回近くまでやっていた。

そこまでいくと既にやっている人はいなく、体力自慢のバスケット部や野球部、陸上部らは幸成を何者だ、といった風に眺めながらも戦力に欲しいと思っている。

女子は容姿が完璧で他の男子がへたれ込む中、全く息を切らしていない幸成は注目の的だ。

100回付近で撃沈したロイは長々と続く、幸成のシャトルランを眺めていた。

不意にロイの後ろから沙耶那と菜月

「ユキ君って、何かスポーツでもやってた？」

「いいや、何も？」

スポーツじゃなく、自衛隊やってます、彼。

「私も160回が限界なので尊敬します」

沙耶那は汗を拭きながら微笑む。

女子で、しかも160回って十分凄いだがと100回前後のロイは苦笑する。

ちなみに女子一位、総合二位の彼女も十分に化け物と言えた。

勿論、胸的な意味も含めてである。

彼女の大きな胸は体操服にはキツイ為、殊更胸を強調し、止めと言わんばかりに走る度に上下に揺れる胸の前に、男子はテント設営者と出血多量者多数という状況だった。

ちなみにロイは前者である……

ついでに言うと、大きなお友達は菜月のぶかぶかの体操服という緩ロリな格好に全滅したのだった……

200回を越えた辺りで先生は時間の尺という物で終わってしまった。

同時に体育館には幸成を讃える拍手が鳴り響く。

「まだ行けるんだがな」と小さく呟いた幸成は流れ出る汗を拭き取った。

「余裕だな」

ロイは幸成にスポーツドリンクを投げて寄越し、幸成はそれを一気に飲み干す。

500mlのスポーツドリンクはあっという間に空のペットボトルに変わった。

「沢山飲んだね。足りなかったら有るよ？」

菜月は水筒を差し出すが、幸成は首を振る。

他の大きなお友達は幸成に嫉妬の眼差しを見せ、他の女子も菜月が断られた事で各所でガッツポーズを見せた。

「幸成君は凄いです。まだ行けそうですね？」

「正直、まだ余裕です」

幸成は笑うと、最後の種目であるハンドボール投げが行われた……

「あゝ、疲れたあ!!」

ロイは屋上で青空を見上げて叫び、サンドイッチを口に運ぶ。

「疲れてるな、ロイ」

「お前は疲れなさ過ぎだ」

ロイは人差し指を幸成に突き付け、サンドイッチを食らう。

「そう言えば、忘れていたな」

幸成は胸ポケットから鳳寿の学生証を取り出した。

「返して来る」

「そうですね。持ち主の方も困っているかもしれませんからね」

沙耶那は弁当箱の蓋を閉めると、手ぬぐいで口を拭く。

「悪い、ロイ!ゴミを捨ててくれ!」

幸成は結んだパンの袋をロイに投げて、階段を駆け降りて行った。

その背中を見送った沙耶那と菜月は今までに見ない張り切りように、目を白黒させる。

「何であんなに張り切ってるのですか?」

「……さあね」

ロイはいかにも知らないという口調で二人に呟くと、幸成の駆けて行った階段を一瞥した。

「幸成君は今朝の人が好みという事ですか?」

「それは違うと思うぜ、沙耶那さん」

「確かに変態さんみたいに誰彼構わずって、訳じやなさそうだからね」

「うつせえよ!!この小学生!」

「しょ……屈辱だ!!抗議を申し立てるっ!!」

腕をちぎれんばかりに振る菜月はまさに小学生だった……

2 - 5 : コンタクト

屋上を下りてすぐ、教室棟の四階である一年生の教室だ。

一年生は先程の幸成の体力テストの結果で持ち切りだった。

そこに幸成が来れば盛り上がりが最高潮に達するのは必然。

C組に向かう幸成に気付いた女子は教室から顔を出して黄色い声を上げる。

無論、幸成は何を騒いでいるのか分かっていない。

幸成は髪を掻き上げるとC組に入った。

言うまでもなく、とんでもない歓声が上がリ、幸成は困惑した表情になる。

「直江先輩、あんたに話があるんじゃない？」という声が聞こえてきた。

本人に自覚有りか？

幸成は話が早いと小声で呟くと「ここに……」と切り出した。

「はい！！」

幸成が言うより早く手を上げたのは目的の人ではなく、今時のギャルといった感じの女性だ。

幸成は困ったように苦笑いを浮かべると「ここに鳳寿って人いるはずなんだが……」という声に周囲がざわつき、手を挙げた少女は笑みをゆつくりと消して手を下げていく。

「神宮寺ならそこに……」と人だかりを指差すと同時に人だかりが割れる。

その先にはこちらに見向きもせず、頼杖を付き、ただ外を眺めている鳳寿の姿があった。

鳳寿は世の中を悲観するような、或いは何かを諦めたような目で外を眺めている。

暗い影を落としている鳳寿に幸成は歩み寄ると学生証を差し出す。

「朝にぶつかったよね？その時に落としたよ。学年を調べる為に中

を見させてもらいました」

「……」

鳳寿は幸成を見向きもせず、外を眺めている。

苦笑いを浮かべた幸成は困ったように後ろ髪を搔くと机の上に学生証を乗せた。

「ここに置くからね」

「……ん……」

鳳寿は短く答える。

暗い、暗過ぎる……

幸成は困ったように監視対象者である鳳寿を見る。

幸成にとって監視対象者と親くなる事が任務で有り、今回の接触はまたとない機会であった。

が、しかしこのような事態になるとは……

「じゃ、行くね」

接触失敗、と考えるに相応しい結果だろう。

が、不意に幸成はある事実を思い出した。

「そうそう。明日、祭りが開かれると聞いたんだけど、一緒に行かないかな？」

我ながら、ロイみたいに必死だ。

馴れない台詞を言った事で全身が栗立ち、軽く身震いする。

あの馬鹿はこれ以上の事をよくもまあ、恥じらいも無く言えるものだと感心してしまう。

幸成が顔を引き攣らせていると窓を見ていた鳳寿がこちらを一瞥した。

すぐに窓に目を戻したが、小さな声で「……ん」とだけ答える。

「ありがとう」

祭りの存在を教えてくれた沙耶那への感謝の気持ちと今日の運の良さに感謝だ。

幸成は教室の出口に向かいながら、嬉しさを隠したその時、裾を掴まれ、幸成は歩みを止めた。

軽く一瞥すると、後ろには先程、手を挙げた少女がこちらを見上げている。

不安そうにこちらを見上げている少女は「手紙の返事は？」と問い掛けた。

「手紙？」

そこまできて、初めて幸成は貰った手紙の一人が1年C組だったことを思い出す。

確か米山麗奈とか言ったか？

「悪いが付き合うつもりは無いんだ。ゴメン」

あっさりと言で返した幸成は我ながら酷いなと内心呟く。しかし、少女の返答はある意味で幸成よりも残酷だった。

「は？私よりもあのブスを選ぶ訳？」

その一言に幸成は眉を潜める。

何様だ、コイツ……

人をブス呼ばわりするこの少女は、女性絡みに疎い幸成の目から見てもそれなりに可愛い部類には入るだろう。

だが、白黒ハッキリ付けるなら彼女よりも鳳寿の方が可愛いと、幸成は思った。

そもそも、本人を目の前にそういう心ない事を言う時点で人として問題外である。

「最低だな……」

幸成は小さく呟くと、思わずヘクセに向ける時のような冷酷な視線を向けた。

仮にコイツがヘクセだったら、幸成は問答無用で撃ち殺していただろう。

そこまで、幸成はこの少女に殺意にも似た感情を抱いていた。

幸成はすぐに前を向くと教室を出て行く。

早足で三人が待つ屋上に向かう幸成のその後ろではヒステリックに喚き散らす少女の声が響き渡り、その一言に幸成は歩みを止めた。ヒステリックだけだったら別段相手にするつもりは無いが、混じっ

て聞こえた一言が問題だったのだ。

「ブス！！放課後、いつもの場所に来いよ」

幸成は舌打ちしたその時、昼休み終了の予鈴が鳴り響いた。
確実にヤバイ……

しかも俺の一言のせいで……

幸成は自分の任務を優先した軽率な行動を恨む。

拳を強く握り、引き返そうと後ろを振り返ったその時、ロイ達の姿が見えた。

「幸成、どうした？もう昼休み終わるぞ？」

「……ああ」

幸成は拳を緩めると足早に三人に駆けて行く。

「どうしたの、ユキ君。顔が引き攣ってるけど？」

菜月は幸成の顔を覗き込むと、首を傾げる。

いつもだったらこのような動作に頬を緩ませるが、今はそんな気になれない。

「幸成君、どうかしましたか？具合でも……」

「いや、大丈夫だよ。何とも無い」

幸成は笑みを作ると否定する。

責任は俺が取らなければならない。

幸成は緩めた拳をにぎりしめると自分の教室に歩いて行った……

2 - 6 : 責任

一日の日程が終わりホームルームが終わって、担任教師が出て行ったのを確認した米山麗奈は外を眺めている鳳寿に歩み寄った。

麗奈の目は冷たく鳳寿を見下ろし、顎でしゃくる。

鳳寿は無言で立ち上がると麗奈の後ろを歩いていった……

「幸成、帰るぞ」

ロイは幸成に笑いかける肩に腕を廻すが、幸成はその腕を払いながら立ち上がる。

「悪い、ちよつと忘れ物したから先に帰ってくれ」

幸成はそう言うのと、カバンを片手に教室から飛び出して行った。

「ロイ君、幸成君はどうしましたか？」

「さあ？何か忘れ物したとかで……教科書とかは机の中だったのに……」

「どうしたんでしょうか？」

「そんな事より沙耶那さん！私と一緒に恋という忘れ物を探しに行きませんか？」

「えーつと……ごめんなさいね」

沙耶那に当たって碎けたロイは呆然としていた。

「私は明日の祭りの事で校長先生にお話が、ナツも園芸部の仕事がありますから……それにしても幸成君はどうしたのでしょうか？」

沙耶那は小首を傾げた……

飛び交う罵声と体に向けられる水。

ただ、濡れてそれに耐えるだけ……

ただ、それに耐えていればいい……

奴らが気が済むまでただ耐えればいい……

鳳寿は手首を針金で縛られて、まるで捨てられた人形のように転がされていた。

麗奈とその他に髪を茶髪に染めた男やいかにも不良といった男達五人が蛇口に付けたホースで鳳寿に水をかける。

「美少女が可哀相じゃん」

「美少女にこういう事するのって良いよな！そそられる」

「美少女、美少女ってブスじゃん」

麗奈は煙草を口に運ぶと紫煙を吐き出す。

このような所を見られれば停学、悪くて退学だがここは人通りの無い学校の奥のトイレだ。

昔、ここで煙草を吸う生徒がいた為、人気の無いこのトイレは鍵が掛けられている。

しかし、針金でも簡単に開く鍵の為、このように使われていた。

鳳寿は濡れた顔が無表情に、横たわっている。

ただ何かに悲観したように……

「何だよ、その目は？ああん！？」

鳳寿の腹に蹴りが叩き込まれ、鈍痛に顔を歪める。

口が切れて、撒き散らされた水が染みる。

口から垂れてきた血が水に混じり、赤ではなく、茶色に変色した。

「おい。コイツ、ヤッチまわねえか？」

「いいねえ」

男達は下卑た笑みを見せるとベルトに手を掛けた。

……アタシ、今から犯されるんだ……

ただその認識だけをした鳳寿はただ水浸しになった床を見つめる。
ただ耐えるだけ……

男が鳳寿のセーラー服に手を伸ばそうとしたその時だった。
「そこら辺にしとけ」

「そこら辺にしとけ」

五人の男と麗奈が振り返ると、そこにはカバンを肩に担ぎ、壁に寄り掛かっている幸成はネクタイを緩めながら片目を閉じて、赤眼・
・カラーコンタクトで隠しているが・・・で男を睨む。

「ああ？お前、誰だよ？」

「あれだろ？王子様だろ？」

「白馬の王子様ってか？ギャハハ！！」

「馬鹿らしいよな。王子様とかハーレムとか……ハッキリ言っ
てうぜえと思ってるぜ？」

幸成はカバンを放り投げると、ネクタイを解いた。

「だけど、テメエらみてえなクズはもつと嫌いだ」

「ふざけんな、ガキが！！」

男は怒鳴り、幸成に拳を振るうが幸成はそれを受け止め、思い切り握る。

男は怒鳴りの代わりに悲鳴を上げ、掴まれた指の骨が軋む。

「喧嘩つてのは相手を見極めてやるもんだぜ？」

幸成は耳元で囁くと悲鳴を上げる男の頬を裏拳で殴り、吹き飛ばす。
悲鳴を上げる男を一瞥すると、口元を歪ませた。

「次は誰だ？」

「なめやがって！！」

今度は二人が幸成に駆け寄って来た。

幸成はリーチの長い足で、男の一人の顔面に回し蹴りを叩き込んだ。男は鼻血を噴き出すと濡れた地面に卒倒する。

続けてその反動を利用した右フックがもう一人を弾き飛ばす。

半目になると笑う。

「おいおい？また立つてくるとかないのかよ？二人でこれじゃ、まだ泣きながら腕を振り回すガキの方が強いぞ？」

幸成が嘯いたその時、最初に倒した男が幸成を羽交い締めにする。この機を逃さんとばかりに駆け寄る男がギリギリまで迫った刹那、幸成は壁を蹴る要領で、迫った男の腹を蹴って宙返りし、羽交い締めから逃れ、羽交い締めしていた男の後ろを取る。

男が慌てて振り返るが、それと同時に幸成のアップercutが顎に決まり、吹き飛ばされた男はもう一人を巻き込みながら床に転がった。

「いい加減に気付けよ。お前達は俺には勝てない」

10歳の時に三村に拾われて、自衛隊の訓練受けて、今は吸血鬼を相手にしてんだ、年期が違うよ。

幸成は内心笑うと目配せをして行けと促す。

それと同時に無傷の男は気絶した男に肩を貸すと慌てて立ち去り、その後ろを残りの男達が着いて行く。

取り残された麗奈を見下ろした幸成は深い嘆息を漏らした。

「……このやり口からいつて常習犯なんだろ？いい加減こんな馬鹿らしい事はやめておけ」

幸成が言い終わるより早く、麗奈は鍬を取り出し、刃を開きながら幸成に切り掛かる。

今の若い人はキレやすい等と聞いた事があるが、まさか刃物まで持ち出すとは想定外の事態だった。

しかも少女が……

幸成の脇腹に鋭い痛みが走るが、HAWKにおいては日常茶飯事。その馴れた痛み顔に顔を歪めると、ニツと笑った。

「馬鹿な事をしてるな！」

幸成は怒鳴ると麗奈の手に手を掛けながら鉄を引き抜いた。

血濡れの鉄を片手に、無表情で駆けて行った麗奈の背中を見送ると、幸成は腹に手を当てる。

日常茶飯事とは言えども痛いものは痛い。

貴方も殺して私も死ぬ……

そんな事にならなければ良いかと幸成は溢れ出る血を右手で押さえると苦笑いを浮かべる。

（死のうとしても簡単には死ねないからなあ……）

それが彼の特異体質とでも言うべき事であり、この年齢で自衛隊の特殊訓練を受けてHAWKに抜擢された理由であるから、利点ではあるが、血生臭い事はここまで来て御免である。

幸成は腹から溢れる血を押さえながら床に倒れている鳳寿に歩み寄った。

「……大丈夫か？」

「……ん……」

鳳寿の縛られた針金を解くと、手を差し出した。

「立てるか？」

「……ん……」

鳳寿は短く答えると、幸成の手を握り返した。

「……何故来た……？」

初めての鳳寿の問い掛けに幸成は驚いたように目を見開いた。

「ああ、祭りに誘っておきながら待ち合わせ場所とか伝えてなかったから、伝えに来た……明日、9時に三神神社でいいよな？」

「……うん……」

鳳寿はそれを聞くと、無表情だがハッキリと答え、びしょ濡れのセーラー服のままトイレから出て行き、幸成は苦笑いを浮かべながらその背中を見送った……

2 - 7 : 痛苦

夕日に向かって鳴く鳥。

これほど虚しい事は有るだろうか？

脇腹は傷が塞がったが、まだ疼く。

流石に回復力は高くても痛覚という物は残っている為、疼くという訳だ。

「畜生……女の方が露骨にえげつないぜ」

幸成は血で濡れたブレザーとワイシャツ姿で歩いて行く。

人目に触れる学校の裏門から出た。

「あれ？ユキ君、どうしたの？」

その声に振り返った幸成の目に、八重歯を覗かせて笑っている菜月が映った。

菜月の手にはジョウロがあり、近くには花壇がある。

「酷いね？どうしたの？ブレザーとかワイシャツが血で濡れたようになってるよ？」

「あ……」

久しぶりに返答に困る質問だ。

そう言えば、自動販売機にトマトジュースが売っていたような……

「さっきトマトジュース飲んでたら嘔せて、零してしまって……」

「見掛けによらずユキ君はドジだね」

菜月は笑うと花を見て、水をかける。

花はまだ芽が出ていない。

「その花は？」

「アケイレギア・ブルガリス。キンポウゲ科オダマキ属の花」

「詳しいね。花が好きなんだね」

「うん。花は……植物は嘘をつかないから」

その一言に幸成は菜月を凝視する。

菜月は何処か淋しそうで、今の彼女は口元に毒舌を吐く彼女とは違

う。

何時もなら小学生と見紛うが、今は小学生にも高校生にも見えない。哀愁の漂う女性の、独特の色香を醸し出していた。

「植物は注いだ愛情の分だけ答えてくれる。信用を裏切らない。私利私欲に走る人間とは違うね」

信用を勝ち取る為には平気で嘘をつくエージェントやスパイ。

まるで自分の事を言われているようだった……

いや、見透かされていた？

「ところで明日のお祭り、待ち合わせますか？」

「あれ？何？誘ってる？」

「いや、別にそういう訳じゃ……」

「きゃー！男は狼だー！！」

頬に手を当て、身をもじもじと動かす。

狼の単語に幸成は顔を引き攣らせた。

こうも連続で心臓に悪い単語を出されると幸成も気が気ではない。

「焦ってるの？可愛い……」

可愛いと、しかも小学生のような可愛い女の子に言われたのは初めてで、自嘲してしまうのは必至……

「そうか……」

「釣れないなあ！で、そっちの都合は？」

「こっちは鳳寿さんと9時に沙耶那さんの神社で待ち合わせてます。そこに合流するという形に出来ませんか？」

「鳳寿さんって、神宮寺家財閥のお嬢様の？」

「はい」

「もしかして玉の輿狙い？」

「違いますから。ぶつかったから、そのお詫びに……！」

「分かってるよ！やだなあ、本気にしちゃって」

菜月のはほんと手を振り、花の葉を撫でながら優しく微笑んだ……

「ふざけやがって!!」

男の怒鳴り声が響き渡り、鉄パイプの音が古い教会に轟く。
今だに癒えぬ傷からは血が垂れてくる。

「直江とか言ったか？あの新参者！」

「麗奈、テメエが鳳寿に一泡吹かせたいって言ったからだぞ」

「何よ！私が悪い訳！？」

「人刺して何言ってるんだよ！」

男は煙草を吹かしている麗奈に怒鳴り、麗奈は気まずそうに目を逸らす。

その時……

「妾達のテリトリーで内輪揉めとはなんと低脳な」

その声に、幸成に叩きのめされた五人と麗奈は古いステンドグラスを見上げた。

六人の目に梁の上に座る金髪のロングヘアを靡かせた妖艶な女性が映る。

女性は赤いゴシックドレスに身を包み、手を口に当てて優雅な笑みを浮かべていた。

「誰だよ、おばさん!!」

その一言に女性は梁から降り、歪んだ笑みを見せた。

「シュトレイゴイカバールの痛苦のミラルダにおばさんとは失礼ね、
下等生物が!!」

女性は穏やかではない叫び声をあげると、右手を掲げた。

同時に六人は悍ましい物を見て悲鳴をあげる。

誰もが嫌悪を示す「それ」は六人の体を一気に包み込み、確実に喰らっていく。

悲鳴と断末魔を、心地の良いクラシックかオーケストラのように聞く女性の目に映るは自分の僕達……

その光景は傷を負った牛が血の匂いで凶暴化したピラニア・ナツテリーに襲われる様子に似ていた。

瞬く間に皮膚を食い破り、内臓を食い破り、心臓を食いつぶす。

普通の人なら直視出来ない光景を眺め、興奮したように頬を朱に染めるこの女性は明らかに異常であった。

僅か30秒の時間でその場に残ったのは、先程まで生きていたとは思えない、深紅の血液に濡れた六つの人骨だけだ。

その光景を見た女性は教会に響き渡る狂笑を口から発したのだった

……

2 - 8 : 謝礼

30分程菜月と世間話をし、20分の通学路を歩き、帰路に着く幸成。

幸成は夕と夜が混ざり合い、赤黒い色を映し出している空を見上げて溜息を付く。

もし、自分に普通に親がいたら、沙耶那や菜月、鳳寿のように――
- 鳳寿は孤立しているが――普通に学校の生活を楽しんでいたのだろうか？

10歳の時にヘクセと関わって三村に拾われてから人生が変わったのは分らないし、関わってなかったら逆に最悪の人生だったかもしれない。

その時には名前すら無かったし、帰る家も無かった。

喋る言葉も無かったし、書く言葉も有りはしなかった。

それを三村が拾ってくれて、今の自分が有る。

自衛隊の訓練は辛かったし、勉強もやりたくはなかったが居場所が有ると思えばこそ成し遂げられた。

16歳の時にHAWKに配属されてからは毎日ヘクセを狩って……
もしかしたら、今回の事態は運が良かったのかもしれない。

学校という場が与えられたのだから……

幸成が空から目線を外し、栗荘を見た。

と、そこには黒塗りのバンがある。

見たことが無いその車から出て来たのは黒のスーツにサングラスを付けた男だ。

手にはアタッシュケース。

仮にこの男がシュトレイゴイカバールの所属だとしたらアタッシュケースには可能性としてMP-5Kが納められているだろう。

MP-5KのKは「kurz^{クルツ}」、ドイツ語で短いを意味し、「H & amp; K社」を代表するサブマシンガン「MP-5」シリーズの

小型にした銃だ。

MP-5Kは小型であり、専用のアタッシュケースに入ればそのまま運用する事も可能だ。

見知らぬ男がアタッシュケース、そしてシュトレイゴイカバールのヘクセと交戦した時に見た白狐……

白狐がシュトレイゴイカバールに仇成す者の監視をしていたヘクセだとしたら、つじつまが合う……

「直江幸成君だね？」

男は笑みを浮かべて歩み寄ってくる。

アタッシュケースに入れたMP-5Kは狙い難い為、近距離で使うのが普通だ。

調度、このように近寄って必中射程に入ったら持ち手に付いた引き金を引けば……

いくら幸成でも近距離で、多数の弾丸を撃ち込まれて生きていられる自信は無い。

幸成が唾を飲み下したその時、男がアタッシュケースを持ち上げて開いた。

そのアタッシュケースの中には札束が詰まっている。

それも諭吉である。

ザッと100万以上あるだろう。

取り越し苦労よりもこの諭吉の束に幸成は激しく狼狽する。

「なっ……はあ!？」

「龍一郎様の御命令です。鳳寿様を助けて頂いた御礼の500万円です。どうか、お受け取り下さい」

「いや……は?ええ!？」

龍一郎……

確か神宮寺財閥の当主の名前だ。

てか、御礼に500万円ってスケールでか過ぎだろ、神宮寺財閥!!

「あの……流石にお受け取りは……」

「しかし、主は是非、鳳寿様に良くして下さった幸成様に受け取っ

て欲しいとおっしゃっています」

部隊の資金には調度良いというのが本音である。

（そもそもHAWKの予算の倍以上どころか、完全に凌駕してやがる……）

H&K社の狙撃銃「SL-8」のサプレッサー標準装備モデルの「SL-9SD」や同じく同社のサブマシンガン「MP-5SD6」を購入すれば武装が大幅アップとなる。

もつとも、対ヘクセ用拳銃「スコトス&フォース」も敵に対して、流体性力学的ショック、簡単に言うとな体内の神経を伝播し、対象に即死並の威力を与える攻撃力を持っているのだが、要はリスクの問題だ。

流石にガンカタ宜しく二丁拳銃を接射で叩き込むのはリスクが高い。

目の前の大金を前に幸成は心が揺らぎそうになるが幸成は首を振る。

「流石に受け取れません。それに俺の一存で貰う訳にもいきません」

「なら親御さんにお話をしましょう」

そう言うのと、男は零荘の一室に歩いていく。

（しかし、まずいな）

目立つなと言われて目立ちまくりだ。

オマケに監視対象者の方からまさかの資金提供。

失態か、幸運かは別にして色々まずい。
半ば諦めたように幸成は頭を掻くと、男はドアをノックし、数秒して三村が顔を出す。

ブレザーに血が付いた幸成とアタッシュケースを持った男に、やはりと言うべきか、三村も同じ結論に達して身構えるが、男もそれより早く口を開く。

「神宮寺財閥の者です。幸成君の保護者様で間違い有りませんね？」

「え、ええ……」

三村は何をやらかした、と目で訴えている。

（そりゃそうなるわな）

幸成は自嘲すると歩み寄る。

「お嬢様である鳳寿様を助けて頂いた御礼でございます」

その声と同時に開けられたアタツシユケースを見た三村は間拔けに口を開けて、何が何だか分からないといった風に500枚の諭吉と男を交互に見る。

「あの……はい!？」

誰だって動揺する額だ。

想像してほしい。

女の子を助けて、満身創痍で帰ったら500万円が家にある。

ハッキリ言って現実味が無さ過ぎて今の状況すら把握出来ないだろう。

正直、まだヘクセの方が現実味がある。

「ほんの御礼です。どうぞ、お受け取り下さい」

「流石に無理です!!」

三村はアタツシユケースを突き返すと男は笑みを浮かべた。

「流石、鳳寿様を御救い下さった方のお父様だ。ですが、せめて50万円だけでも受けとって下さい」

諭吉が50枚でも相当だぞ、と突っ込みたい衝動を抑えていると三村は「50万なら」と受け取った。

(可笑しいだろ!!)

幸成は驚くと男は「ありがとうございます。これで私もお叱りを受けずに済みます」と笑い、アタツシユケースを閉めた。

そして男は三村に一礼すると車に乗り込んだ。

黒塗りのバンを呆然と見送る幸成は車の影が小さくなったのを確認して、三村を見た。

「おっちゃん!!可笑しいって!!」

「流石に受け取りなくなかったが、少しは受け取らないとお兄さんが気の毒だろう」

一理あるが、少しが50万だと!?

幸成が内心叫んだその時、三村の太い腕が幸成の頭を鷲掴みにした。

「それより、聞きたい事があるんだ。幸成君」
三村は笑顔で言つと凄まじい力で幸成を中に引きずり込んだのだっ
た……

2 - 9 : 被害者

中に引きずり込まれた幸成が三村に事情を話し終わると深い嘆息を漏らした。

事情が事情であつたし、むしろ信用を勝ち取れた可能性がある。

が、しかし、殺傷沙汰――幸成はぴんぴんしているが――であるのもまた事実。

停学は確実、退学の可能性も十分有り得る。

「最悪だ……」

三村は頭を抱えると頭を掻いた。

「過ぎた事をクヨクヨ言つても……」

「仕方ないが、転校二日目でやらかしやがつて……」

幸成の最後の一言を遮り、三村は再び深い嘆息を漏らした。

その時、ドアが開く音が響き渡り、「大丈夫じゃないですかあ？」と彩花が入って来る。

「立ち聞きさせてもらいましたけどお、その心配は無いと思いますよお」

彩花はそう言つと部屋に上がり込んだ。

「だってえ、相手はリンチをしたうえにい、犯そうとしたんですよ？それを考えたらあ、そいつらが密告する可能性は無いと言えます。それに幸成も刺されてますからあ、間違いなく非はあちらですよお？」

確かにその通りだったが、奴らが密告したとして、果たして本当の事を言うだろうか？

そもそもこちらも手を出している為、正当防衛が適用されるかさえ怪しい。

「まあ、その時にならなきゃ分からんだろう」

「そうですね。そういえば貰った500万円は何処ですかあ？一人100万円の山分けで調度良いですからあ……」

やはりこの人は金が目当てだったか……

「50万円しか貰ってないから……」

「丸が一つ少なくなっても十分ですよ？ 貰えるお金は貰います」

「いや、これは防衛省にしっかり報告して、今後どう扱うか検討する必要がある。下手をすりや賄賂に成り兼ねないからな」

「えええ！？ 別にあちらが気持ちと言っているんだからいいじゃないですかあ！」

彩花はいかにも不満です、と主張しながら頬を膨らませる。

三村の対応は当然なのだから仕方ないが、またとない資金調達の機会であり、逃すのは勿体ない。

上手く、優にやらせれば改造武器が新たに作られるのだから……

「勿体ないですよお？」

「とにかく、今は防衛省に掛け合ってみる。勿論、直に、だ。下手をすりやエシユロンに探知されて、米軍がでしゃばって来るかもしれないからな」

エシユロンとは簡単に言えばアメリカのNSAが保有する、電話やメール、インターネットを監視する大規模な盗聴器なるものだと思っ
て欲しい。

日本には無いと言われているものの、どこまで信用出来るか疑われる。

今回の事で揚げ足を取られたらそれこそ面倒だ。

「という訳で、俺は今から防衛省に向かう。四人はしっかりとヘクセの監視をするように！！」

三村本人も、やはりこの50万円が欲しいらしい。

流石、貧乏部隊と幸成は笑った……

長い石段に並ぶ桜並木。

まだ芽しか出ていないこの木も春が本番になったら綺麗な花を咲かせ、薄い桃色の花びらを風に舞わせるだろう。

その石段には紅白の提灯が並び、明日にはお祭りが始まるのだと告げる。

沙耶那は最後の調整に見回りをしていた。

不備が有ったら申し訳が立たない上、楽しみにしている人達の期待を裏切る事になる。

その最後の見回りを行っている沙耶那の姿は典型的な巫女服で、巫女さん属性を持っている人は狂喜乱舞してしまう程に映えた。

明日の舞の練習も終わり、これが終われば、今日は何も無い。

昨日の夜は家の仕事の為に外出禁止令を破って外に出たが、今日はそれが無いのが嬉しい限りだ。

「明日が本番……凄く楽しみ」

沙耶那は微かに笑うと空を見上げた……

三村が防衛省に出向いている間、幸成達、HAWK隊員にもう一つ事件が発生していた。

「GARUDAが使えない!？」

幸成と優は同時にロイに迫ると、ロイは「落ち着け」と弁明する。

「そもそも偵察衛星が同じ場所に留まると思ってるのか!？」

「違うんですかあ？」

彩花は食後の紅茶を啜ると片目を開けてロイを見る。

ロイはやれやれと金髪の髪を靡かせながら首を振った。

「偵察衛星は低軌道を取って、一日一回から数回、同じ時間に同じ場所に現れる。その時間に固定しないと使うタイミング逃す。使用

出来る時間は19時から24時の間。つまり、まだ使えないんだよ！！」

ロイは時計を差す。

時計は18時を半分回った程度だ。

「しかも、華景市の上空にいない場合は米軍の管理下に置かれて使用出来ない」と契約書に書かれていただろう」

ロイの一言に三人は華景市に行く前に書かされた契約書の一文を思い出してそれぞれ納得する。

本当に特殊部隊の面子かと疑うが、改めて申し上げるが彼らは「その道」のエキスパートだ。

あくまで「その道」のであるが……

「という事は、その監視タイミングをシュトレイゴイカバルにバレたら悲惨じゃないか」

優の一言にロイは「だから言いたくなかったんだ」と苛立ち混じりに呟く。

「考えて見る！仮にここに盗聴器が有ったらさっきの情報が筒抜けだ。ここに来て俺達しか出入りしてないから良い物を……」

確かにロイの言う通りだ。

偵察衛星の監視時間は一定である為、その監視時間を避けて行動すれば空からの目をかい潜れる。

つまり、偵察衛星が形骸化しかねないという事だ。

「それで思い出したんだがロイ。昨日の衛星の写真を頼む」

「どうかしたの？」

「コイツが都市伝説の白狐を見たんだと」

「白狐ですかあ？」

「ああ。ヘクセを追跡中に偶然確認した。路地裏だったから衛星で確認出来るかは分からないけど……」

「それを今から確認すればいいだろ？」

ロイは嘯くとパソコンのキーボードを叩き、昨日の衛星の録画映像を出す。

録画映像は青で彩られ、幸成達は赤で、熱を発する移動物は白で映し出され、肝心のヘクセは緑で移される。

「何処で見たんだっけ？」

「ワイヤーでの移動中」

「ワイヤーでの移動中つと……これだ」

ロイは手早く映し出すが青く染められた路地裏には何も映っていない。

「何も映ってねえぞ？」

「確かに見たんだが……」

幸成は小首を傾げると何も映っていないHSVの映像を凝視した。

「まあ、そのうち分かるんじゃない？」

優は楽観的に笑うとテレビを付けた。

「おいおい、任務中にテレビを見るな……」

幸成が諫めたその時、テレビの向こう側で血相を変えた女性キャスターがマイクに言葉を吹き込んでいた。

（先程、山林で見付かった六人の死体の身元が判明しました。死体は華景高校の生徒で米山麗奈さんと……）

「嘘だろ！？」

「どうかしましたかあ？」

「コイツらだよ！！例の六人！」

幸成は映し出された六人の写真を見て怒鳴る。

その六人は間違いなく米山麗奈とあの男達五人組だ。

狐につままれたような顔の幸成は「何で……」と呟く。

仮にヘクセだとしたら複数か？

ヘクセは襲う相手の前提として、血を吸う相手が異性である場合が多い。

これは実際の吸血鬼伝承にも多く見られる事だ。

また、血を吸う事で、血を吸われた相手は性的快感を得る。

これも吸血鬼伝承に見られる事だ。

つまり、卑猥ではあるが結論から言つと吸血鬼の吸血というのは人

間で言うところの性交である。

ディック・チャンバーの時も、首に齒を突き立てて飲むのではなく、刃に付いた物を舐め取る程度であったのは記憶に新しい。

男のヘクセは女性を、女のヘクセは男性を襲うのが普通なのだが……

「恐らく逆鱗に触れたんでしょうかねえ？可能性としてはヘクセが複数かあ、ブチ切れたたししか考えられませんかからねえ」

彩花は人事のように呟くと紅茶を啜る。

逆鱗に触れたとなれば、話は早い。

（たった今情報が入りました！死体は白骨化していたと警察から発表がありました！）

血を吸われて縮んでも白骨化する事は有り得ない。

「やはりですかあ。言ってしまうえば想定範囲内ですねえ」

彩花はそう言うと、テレビのチャンネルをニュースからドキュメンタリーへと変えた……

3 - 1 : 祭り（前書き）

第3話

3 - 1 : 祭り

春風が吹く華景市はいつも以上に賑わっていた。
祭りというだけに多くの人達が華景市に訪れている。

「何を着ればいいかな……」

幸成は布団の上に並べられた私服の数は非常に少ない。

（無難にワイシャツとズボンという出で立ちでいいかな？）

単にブレザーが無い学生服だと突っ込むのは無しだ。

幸成はワイシャツにネクタイを緩めに締める。

「まあ……大丈夫だろ」

幸成は笑うと財布と携帯電話をポケットに仕舞うとドアを開けた。
目的は鳳寿の信用を勝ち取る事と沙耶那、菜月の素性を正確に洗う事だ。

鳳寿の信用を勝ち取り、神宮寺財閥の事を聞き出すのが目的だが、
沙耶那と菜月の素性は知っておきたい。

沙耶那と菜月は親しいようで実際の所は何も分かっていないのだ。

沙耶那は三神神社の娘、菜月は華景高校の園芸部、知っているのは
その程度であり、情報と言える情報ではない。

この機会に何らかの情報を掴み、何らかの形で使えるように、要は
協力出来るように出来れば最高だ。

幸成はドアノブを掴むと大きく深呼吸をした。

「Take the field!!（出勤だ）」

「お父様、舞踊の為の楔は終わりました」

白い小袖に緋袴の装束の沙耶那は笑顔で父親の三神翼^{みかみ つばし}に笑いかける。

「あゝ」

翼はやる気ない返事で答えた。

彼にとつて、寝ると食べると娘が唯一、やる気が出る話題だ。祭りの事は彼にはやる気が出ない話題の一つである。

毎年、準備をして色々大変であり、無気力な彼には苦痛以外の何物でもない。

ただし、娘である沙耶那の舞踊は別である。

「あなた？もつとやる気を出して上げて下さい」

「それなりに、な」

それを諫めたのは沙耶那の母親の三神望^{みかみのぞみ}は腕を組み、子供のように頬を膨らませた。

父親の翼は切れ長の瞳に端正な顔立ち、母親は可愛い端麗な顔立ち、そんな美男美女のカップルから生まれたのが沙耶那のような女の子だというのが頷ける。

「お母様、今日は良い天気ですね。お祭りには良い日和でございます」

「そうですね。とっても良い日和ですね、沙耶那」

望は優しく微笑むと空を仰ぎ見た。

参拝客の姿はちらほら見え、祭りが始まるのだと告げている。

「今日を楽しい日にしましょうね、沙耶那」

望は娘の沙耶那に優しく微笑み、沙耶那も微笑みを返した……

つくづく、自分はオシャレに向いていないな、と苦笑する幸成は三神神社に歩いていった。

多くの参拝客しかり見物客で狭い道が人で埋め尽くされている。

（予想以上に人が多いな）

三神神社から雲荘までは地図から見る限り、徒歩で約10分程度の距離だがこの人混みでは少し掛かりそうだ。

「ユキく〜ん!!」

幸成を呼ぶ、元気な呼び声に気付き、向こう側から駆けて来る菜月を見付けた。

菜月はオシャレなフリルの付いた白いワンピースを着ている。

「……可愛いな……」と言って、幸成はポーチだと思っていた紐を見て、水筒だと知り、吹き出した。

「小学生の遠足か!？」

「何か言った？」

菜月は上目で幸成を見上げる。

いたいけな様子の菜月の可愛い仕草に幸成は頬を緩ませた。

「わざわざ向かえに来てくれてありがとうって言ったんです」

幸成は菜月の頭を優しく撫でた。

故意というよりは無意識といった感じで、菜月が小学生のような風貌だったからという事もあっただろう。

頭を撫でられた菜月は狼狽しながらも、主人に甘える猫のように気持ち良さそうに甘える。

「菜月『猫』の式が今、幸成の中で成り立った。

「ほええ〜、ユキ君の撫で撫で、とっても気持ち良いよ〜」

うつとりと目を細める菜月は愛嬌のある声で幸成にじゃれつく。

不意に冷静になって気付くと周りの視線が突き刺さり、幸成は頭を撫でるのを止めた。

冷静に考えたら幸成が小学生にちよっかいをしているようにしか見え、事情を知らない人が見たらロリコンやペドフェリアに成り兼ねない。

子供を恋愛対象に見たり、幼女で欲情したら犯罪者、現在の状況では言い逃れは出来ないだろう。

幸成は慌てて手を引っ込めると歩き出した。

「えっ?ちよつとユキ君!何で止めちゃうの!?!ねえ」

菜月も幸成の背中を慌てて追い掛けた……

「チツ！幸成の野郎！三回爆発してエロゲの世界に転生すりゃいいんだ！」

憎らしいと言わんばかりに爪を噛むロイは二回の自室から楽しげに歩く幸成と菜月を双眼鏡で見つめる。

横で見ていた優も小さく呟いた。

「何で小学生と付き合ってるの！？横のロリ……M134で蜂の巣にしてやりたい……」

「なっ！？」

「M134 ミニガン」とは手っ取り早く言えばガトリングである。7.62×51mm NATO弾という高威力のライフル弾を使用するその重機関銃は毎分2000〜4000発で弾丸を発射する為、ヘリコプターはおろか人間なら木っ端みじんだ。

蜂の巣どころの話ではない。

「物騒な事を言うなよ、おっかねえ」

ロイは軽く震えながら恐怖しつつ、優を見る。

彼女ならやり兼ねないから恐ろしい。

「あらあらあ、嫉妬は恐いですねえ？お二人さんは少しは落ち着いて下さいねえ」

「彩花さん、こんなの見ても胸糞悪いだけですよ」

ロイは頭を掻きながら彩花に言うが、彩花は優雅に紅茶を飲む。

「それは貴方がお相手を見付けられなかっただけですよねえ？優の方も大好きで仕方ない幸成を誘えなかったからですよねえ？」

「「それを言われると言い返せない……」」

ロイと優は言い返せない齒痒さに溜息を漏らす。

元よりこの彩花という人物に勝とうという事が無謀である。

「さてさてえ？望遠レンズも取り付けてしっかり弱みを握りましようねえ？」

魔王か、この人は……

二人は抗えない歯痒さと幸成の弱みを握れる絶好の機会を逃さん為に望遠レンズを取り付ける。

ロイが望遠レンズを覗くと、意外にも二人はもう三神神社の石段の手前まで来ていたのだった……

3 - 2 : 選択

人混みの中を歩き、三神神社にたどり着いた幸成と菜月の前に黒塗りのバンが止まっていた。

見覚えのあるナンバープレートの車に幸成は歩み寄ると後部座席から白いセーラー服姿の鳳寿が出て来る。

鳳寿は相変わらずの無表情で幸成と合流すると、菜月を一瞥した。
「待ちましたか？」

その問い掛けに鳳寿は首を振る。

正直、拍子抜けしたというのが感想であった。

鳳寿は財閥のお嬢様なのだから何かオシャレな服を着てくると思っていたのだが……

「鳳寿さん。何で学生服？」

「……先輩も……」

そういえばそうだったな……

（それにしたって、貧乏人もといて貧乏部隊の俺はともかくお嬢様の鳳寿がセーラー服か……）

幸成は怪訝な表情で眉を潜めると「あれ？皆、お揃いでお出ですか？」と笑いながら沙耶那が石段を降りてくる。

沙耶那の大振りの胸のせいで神聖な巫女服が目のやり場に困る服装に変わってしまう。

幸成は沙耶那の胸をチラと見ると申し訳なさそうに空を見上げた。
しかし、再び見てしまうのは男の性だろう。

「もう少しで舞踊が始まります。上でゆっくりして行って下さい。上には少しですが露店が並んでいますよ」

「サヤ、わたあめ有った？」

「ええ」

「やった！ちよつと買ってくる！ユキ君、先に行ってるね」

「私も舞踊の準備がありますので先に行きますね」

「分かりました」

二人の背中を見送った幸成は鳳寿を一瞥する。

鳳寿は笑うという事もなく、ただ無表情に俯いていた。

何かふさぎ込んだような鳳寿を一瞥した幸成は笑いかける。

「えーっと、良い天気だね？」

「……ん」

「傷、大丈夫？」

「……ん」

「あー……」

「……無理しなくていい……アタシに関わった人は皆死ぬから……」
鳳寿はそう言っていると駐車させていた黒塗りのバンに向かって歩き出した。

それを幸成は腕を掴んで制止するが鳳寿は負けじと怒鳴る。

「何で皆がアタシを避けているか分かるか!？」

「……」

「アタシに関わった人が皆死んでるからだ!!アタシは運命に呪われてるんだ!!」

「何を言って……」

「昨日、アタシにちよっかいを出した奴が死んだし、先輩だって刺された!!アタシに関われれば死ぬんだ!アタシは死神だから……」

「……お前、馬鹿じゃねえの？」

幸成は面倒臭そうに髪を掻き上げる。

「この世に死神なんていねえよ」

吸血鬼はいるけど……

「あいつらは何かの事件に巻き込まれて死んだ。俺だって昨日刺されても、今日はびんびんしてる。お前が死神な訳あるかよ!!」

幸成は大声で怒鳴り返すと周りの参拝客が何事かと凝視した。

しかし、幸成はそれを無視して続ける。

「お前が何でそんなに暗いのかは知らない。だが、お前と関わっても俺は死なない」

お前と関わっても俺は死なない――お前と関わっても自分は死なない――かつて三村に言われた言葉。

10歳の時に三村に会った時に言われた言葉だ……

鳳寿は昔の俺みたいに何かを背負ってる。

重い十字架のような何かを……

「一人で抱えるな。俺は死なない。約束するよ」

幸成は俯く鳳寿に優しく笑いかけるとその手を離れた。

信用してくれるかは彼女次第だ。

今は任務の為ではない。

彼女の為だ。

彼女が一步步み出るか、今のままか、それは彼女次第であり、幸成もした選択肢であった。

どちらを選ぶかは彼女次第だが、前者は何か有るかは分からない、そして後者は安定しているが今のままだ。

俺は前者を選んだが、彼女は……

幸成は鳳寿を見つめると、鳳寿は車の中に入った。

無理強いではないのだから、彼女の選択にどうこう言つつもりは無い。

ただ残念ではある……

幸成はゆつくりと目を閉じ、髪を掻き上げながら溜息を漏らしたその時だった。

「……先に返って下さい……帰りは徒歩で帰ります」

「しかしっ!!」

「……聞こえなかった？」

鳳寿はそう言うのと有無を言わさなといった風に車の扉を閉め、車から出て来た。

拍子抜けし、口をあぐり開けた幸成に初めて笑って見せる。

「これから何処に行く？先輩？」

「あゝ……取り敢えず神社に行こう」

「……うん」

笑えば可愛い、と幸成は鳳寿を見て思う。
二人は黒塗りのバンを見送ると石段を上っていった……

3 - 3 : 舞

石段を上り終えた二人は改めて神社の人混みの多さに驚いた。

神社は石段を上った場所が広い空間となっており、そこに屋台や露店が並んでいる。

そして沙耶那の舞踊が行われる場所は広場の奥にある古い建造物だ。その建造物は一般的な劇場の舞台のような構成で、その隣に本殿となっていた。

その本殿の後ろが沙耶那自宅である。

「人、結構多いな」

「……うん」

こりや菜月を探すのも一苦労だな、と思った矢先、幸成の名前を呼ぶ声が聞こえ、人混みを掻き分けてやって来る菜月の姿が見えた。

菜月の手には屋台の戦利品であろう、わたあめやリンゴアメ、シェイクが握られている。

それを抱える姿は殆ど元気な小学生だ。

菜月が合流すると幸成は笑いを堪えて言う。

「随分買ったな。お金、大丈夫か？」

「うん」

菜月は元氣良く答えるとわたあめを口に運ぶ。

わたあめを小さな口で精一杯頬張る姿は愛らしく、思わず笑いが零れる。

「そんなに慌てて食べなくてもいいだろ！」

それを聞いた菜月は上目で幸成を見ると、わたあめを食べながら口を開く。

「だって美味しいんだもん！ユキ君も食べる？」

「いや、俺はいらない」

菜月はその答えを聞くと口を尖らせるが、すぐに鳳寿にリンゴアメを差し出した。

「はい。奢りだよ」

「……ありがと……」

鳳寿は躊躇いながらもリンゴアメを受け取り、リンゴアメを舌先で舐める。

同時に鳳寿は目を見開き、「美味しい」と呟く。

「ところで沙耶那さんの舞踊はいつ頃始まるんですか？」

「あと少しかな？」

菜月はわたあめを頬張り、飲み込むいつもの水筒から飲み物を出す。

相変わらず同じスポーツドリンクで幸成は苦笑する。

ましてや、シェイクを買っておきながらそれを飲むかというツッコミもわかり。

幸成達は舞踊が行われる場所まで行くと、間もなくして笛の音が響き渡った。

見物客は一齐に建物に近付き、舞台の上を注目する。

そんな中、幸成は近くにあったパンフレット置場からパンフレットを取り、それを開くとその舞踊の解説を見る。

この舞踊はかつて人々に暴力を振るっていた鬼を退治する白狐の伝説を元にした物だ。

人々に狼藉を働き、沙耶那の先祖の巫女をさらった鬼は華景市の桜を咲かせないように呪いをかけた。

その鬼を退治する為に、華景市の守り神であった白狐が立ち上がり、白狐は鬼と相打ちになりながらも鬼を退治し、巫女を助け出す。

その白狐の死体を燃やした灰を巫女が撒くことで桜の花が咲き、白狐を神として崇め、巫女を「神子^{みこ}」として崇めた。

そして、毎年桜が咲くようにと祈願するようになったのがこの祭りである。

（まるで花咲か爺さんだな）

幸成はパンフレットを畳むと始まった舞踊を見た。

横笛の音色と和太鼓の音とともに般若の面を付けた男性が入場して

くる。

般若、つまり女の鬼が刀を振るい、舞を見せた。激しいその舞は鬼の恐ろしさを醸し出し、刃が太陽に照らされて煌めく。

その様に泣く小さな子供を見ると、秋田のナマハゲがやって来た時の子供の反応を思い出させる。

笛の音と和太鼓の音の調和が佳境に入ったその時、巫女役の沙耶那が綺麗な扇を持ち、舞を踊りながら舞台に入場した。

刀と扇が舞い、巫女が捕らえられる場面が行われる。

鬼は巫女の首に刀を突き付け、沙耶那の後ろに鬼が回り込み、刀を突き付けながら奥に消えていく。

それと同時に白狐の面を付けた女性が現れた。

女性は巫女が連れ去られた事を嘆くと同時に笛の音が響き渡る。

それはまるで狐の鳴き声であるかのように……

狐の鳴き声が響き渡ると般若と沙耶那が現れ、和太鼓の音が響き渡り、テンポが激しくなる。

白狐と般若が刀で舞いながら交差し、演舞が数分行われた。

そして、和太鼓と笛の音色が落ち着くと、般若と白狐が退場し、残された沙耶那が自分を助けてくれた白狐の為に舞を踊る。

舞いはどこか儚げだが、優雅で……

菜月が語った通り、綺麗で美しいその舞いは見物客や参拝客の目を引き、幸成さえも見取れてしまう。

舞が激しさを増したと同時に桃色の紙吹雪が舞い上がり、一斉に拍手が鳴り響いた。

舞い散る紙吹雪の中で踊る沙耶那は非常に美しく、まるで本当に桜の中で踊っているようだ。

拍手が鳴り響く中、沙耶那は優雅な舞いを踊り続けたのだった……

3 - 4 : 合流

靴がコンクリートを叩く音が二つ。

片方はスポーツシューズともう片方がハイヒールだ。

「助けてくれ！！誰か！！」

男は大声で叫びを求めるが、今日は祭りの日で路地裏の人通りは無い。

転びそうになりながら逃げる男は深淵の中に向かって逃げていくようだ。

その後ろを追い掛けるハイヒールの女性はトンプソンM1928サブマシンガン銃口を上に向けながら速足で追い掛ける。

M1928はギャング映画に必ずと言っていい程出てくるサブマシンガンで、シカゴマフィアに好んで使われ、独特の発射音から「シカゴタイプライター」や「シカゴピアン」とも呼ばれていた銃だ。

「どこに逃げるのかしら？」

女は円形の50発入りドラムマガジンを取り付けたシカゴタイプライターを構えると引き金を引いた。

その名の通り、タイプライターを叩いた時のような銃声と同時に逃げていた男は地面に倒れる。

シカゴタイプライターが使用する・45ACP弾は拳銃弾としては強力な部類に入り、それで足を撃たれば転倒は必至。

男は転倒しながらも両手を交互に出して這うが、女の速さよりも遅く、逃げるのは不可能だ。

「誰か……」

血を右足の太股から滴らせ、力無く助けを求める男の足に、女はハイヒールを上げ、男の傷口に思い切り下ろした。

「ギャアアアアアア！」

男の絶叫が轟くと、ハイヒールが傷に食い込み、男の悲鳴がさらに凄みを増す。

「すぐに気持ち良くなるわよ？ 激痛の後の快楽程、良いものは無いわ」
そう言うと、女は失禁した男の髪を掴み、持ち上げると首に噛み付いた。
飛び散る鮮血が路地裏と女の服を濡らし、男の目は白目を向く。
涎れをだらし無く口から垂らす男は小刻みに痙攣させると、その男は意識を霧散させていった……

舞いが終わり、三人は沙耶那の家に向かった。

昨日のうちに菜月が沙耶那と連絡を取り、舞踊が終わったら合流する手筈を整えてくれたのだ。

本殿の裏手の一階建ての家に挨拶をして入った三人を迎え入れたのは白狐役をしていた沙耶那の母、望だった。

長い黒髪を後ろで束ねた美しい女性だ。

望は三人を見ると頬を緩ませる。

「菜月ちゃん、いらっしやい。それと、失礼ながらこちらの方達は？」

「転校生の直江幸成君と神宮寺鳳寿さん」

「初めまして、沙耶那の母の望です。娘がお世話になってます」

望は深々と一礼し、幸成も慌てて一礼する。

「いえいえ！！自分の方が沙耶那さんにはお世話になってます」

幸成は頭を上げ、何気なく前を見るとむっちりとした二つの丘があった。

ゆったりとした着物が沙耶那に負けない大きな胸で窮屈となり、幸成は天井を見上げ、その場しのぎでごまかす。

その時、奥の方から沙耶那の声が聞こえ、沙耶那は顔を覗かせる。

「すいません。待ちましたか？」

「ううん。待つてないよ」

菜月は笑顔を見せると、明るい赤の着物を着た沙耶那が出てくる。大和撫子を体言するような彼女は男性なら思わず溜息を漏らすような美しさが有り、可憐だ。

「ところで沙耶那？」

「どうしたの、お母様？」

「誰が幸成君と付き合ってるの？」

その問い掛けに幸成と沙耶那が顔を紅潮させて口を開ける。

「お母様！！」

「あれ？もしかして誰も付き合っていないの？幸成君はイケメンだから皆狙ってるでしょ？」

「……別に」

「ナツも恋愛対象としてはみてないな」

（露骨に傷付くな、その発言……まあ、そりやそうか）

幸成はばつが悪そうに頭を掻くと奥から男性が飛び出してくる。

「沙耶那が付き合ってるだー！？」

セミショートに白い着物を着た男性は日本刀を引き抜くと沙耶那と望の間に割って入り、幸成に刀を振り下ろした。

どうやら鬼の役をやった人物のようだ。

男性は左足を前にし、上段に構えた刀を斜めにした構え「左上段」で幸成まで、駆け寄る。

左上段で構えられた刀が振り下ろされ、空を斬る音が響き、刃が閃く。

慌てた幸成はその刃を眼前で受け止めると、男性は幸成を斬るべく切っ先近くの峰を押さえながら怒鳴る。

「娘を誑かしやがって！！」

「何の事だよ！？」

幸成は歯を食いしばり、その力に対抗する。

人生で初めて白刃取りを成功させたはいいが、後にも前にも引けな

いからにはどうしようもない。

驚いた菜月と鳳寿は玄関の壁に取り付き、助けは望めない。

「あなた！！真剣で切り掛かるのは止めて下さい！！」

真剣って普通に危ねえじゃねえか！？

望の声を聞き、条件反射で受け止めて良かったとつくづく思う。

刹那、男性は望に頭を叩かれて刀の柄から手を離して頭を押さえる。

「つつ！何をする、望！！天誅の邪魔をするな！！」

「あなたを天誅してやるわよ！」

望は腕を捲り、男らしく怒鳴ると、幸成を見て再び深々と頭を下げる。

「家の主人がご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

幸成は真剣を地面に置くと深く嘆息を漏らし、白い刀身を一瞥する。いくら回復力が高くても刀で頭をかち割られれば死んでいただろう。流石に知り合いの家で、その父親に斬り捨てられるのは御免だ……

「こちらが夫の翼です。見ての通り親バ力です……」

「ごめんなさい。怪我は無いですか？」

「あ、ああ……奇跡的に大丈夫……」

本当に奇跡的に……

「お父様も謝って下さい」

「笑えねえ……娘に纏わり付く虫を払うのは父親の役割だろ？」

「「謝りなさい！！」」

沙耶那と望はまるで母親か姉のような口調で翼に怒鳴り、翼は面白くなさそうに口を尖らせる。

「……申し訳ありませんでした……一つ言っておく！！沙耶那を泣かしたり、付き合うようなら斬って捨てる！！」

胸を張って堂々と宣言する翼は再度頭を叩かれ、よろめく。

下手をすればヘクセよりもこの人に、勘違いで殺されかねないと幸成は苦笑する。

「では、行ってきます」

沙耶那が言っていると両親はゆっくり頷き、手を振った。

その見送りを背に沙耶那の家を出た四人は広場の屋台に向かう。
楽しいはずの美少女との祭りだが、幸成はある意味で肩身が狭かった。

美少女三人と一緒にいる幸成に刺さる視線が痛い、痛すぎる。

（殺意すら感じるぞ、おい……）

幸成は紺色の髪を掻き上げると深い嘆息を漏らした。

「どうしたのですか？」

「いや、敵は一つだけじゃないって思ってたさあ」

沙耶那の問い掛けに幸成は苦笑いを浮かべ、三人は首を傾げる。

「そのモテモテの兄ちゃん！」

不意に肩を叩かれた幸成は条件反射で身構えるがそこには中年の男性が立っていた。

男性は煙草を口にくわえ、満面の笑みで近くの屋台を指差す。

「彼女達のプレゼントに射的でぬいぐるみを取らないかい、兄ちゃん？」

男性は射的の屋台の人らしい。

見ると可愛いぬいぐるみが並べられている。

「うわあ！！可愛い！！」

「幸成君、お願い出来ますか？」

「はい。一回何円ですか？」

幸成は財布を開きながら男性に問い掛ける。

「弾が3発で300円！6発で500円だ」

「じゃあ、3発分で」

幸成は100円玉を3枚取り出し、男性に手渡した。

「3発では取れないと思うよ、兄ちゃん？」

「やらなきゃ分かりませんよ」

幸成は笑って見せると射的台に立ち、射的用のおもちゃのライフルを掴む。

ボルトアクションを模したライフルのバネを後退させて、プラスチックの皿に乗せられたコンクをライフルの先端に詰める。

「それぞれ何のぬいぐるみがほしい？」

「ウサギのぬいぐるみをお願いします」と沙耶那。

「猫さん！」と菜月。

「……熊」と鳳寿。

ある意味それぞれ動物に例えたらそうなりそうだ。

「了解」

幸成はリアサイトの間にフロントサイトが見え、目標に銃口が重なるようにライフルを構える。

そして、ゆつくりと力まずに引き金を引くと、レバーが前身してコルクが発射された。

コルクはウサギの額に当たり、台から落とす。

シガレットやラムネ等は簡単だが、ぬいぐるみとなると倒すのは難しい。

幸成はそれをたった一発でやってのけたのだ。

男性もまさか一発で倒すとは思っていなかったらしく、啞然とし、口にくわえていた煙草を取り落とす。

「まずは一個目な？」

幸成はレバーを引きながらニツと笑い、コルクを詰める。

「次！！」

狙撃の要領と同じだ。

目標のバランスが悪い場所にコルクをピンポイントで叩き込んで倒す。

ましてやヘクセのような速く動く相手に拳銃を使うのと違い、全く動かないぬいぐるみを照準の固定がし易いライフルで狙うのは非常に簡単だ。

しかも幸成は射撃能力が高い自衛官に贈られる射撃徽章を持っている為、二メートルの距離の射的は造作も無い。

二つ目の猫も易々と倒した幸成は最後の熊のぬいぐるみに銃口を向ける。

そして案の定、簡単に熊のぬいぐるみを撃ち倒した幸成は悔しがる

男性からぬいぐるみを受け取り、三人に配る。

「ユキ君凄い！射的のプロ？」

「一応、初めてやった」

幸成は頭に手を当てて笑う。

「……ありがとう」

鳳寿は熊のぬいぐるみを満足げに見ながら呟く。

「幸成君は何をやらせても得意そうですね？何か苦手な物とがありますか？」

「苦手な物が……」

ロイの女癖の悪さとヘクセ、と答えられる訳もなく幸成は考え込む。冷静に考えたら苦手な物はあまり無いかもしれない。

基本的に自衛隊の訓練は何かあったし、炊事や洗濯等の家事も人並みに出来る。

「正直、思い当たらない……」

幸成は難しい顔で唸りながら答えると、沙耶那は「それは凄いですね」と笑いかけた。

と、同時に菜月は近くにあった金魚掬いに駆け寄る。

「皆で金魚掬いやろ！こうなったらユキ君の苦手分野を洗いざらい見つけ出してやる」

菜月は無邪気に笑うと、三人は金魚掬いの屋台に歩み寄った……

3 - 5 : 謎掛け

デジタル時計が17時のアラームを鳴らした。

任務の都合上、この時刻には切り上げなければならない。

腹が減っては戦は出来ぬとはよく言った物だ。

実際の所、任務の一時間前に夕食を食べ、尚且つ腹ごなしをしないと力を発揮出来ない。

つまり、偵察衛星が固定される19時の一時間前には帰る必要があるのだ……

「俺、そろそろ帰ります。血吸い人が恐いですし」

幸成は冗談混じりに笑うと鳳寿も「……アタシも」と呟く。

「じゃあ、今日はお開きにしましょうか」

沙耶那は優しく微笑むと、全員から貰った金魚を見ながら大きな声で言う。

「じゃあ、明日も皆で遊ぼう？せつかくの三連休なんだしね!!」

菜月はそう言うのと、携帯電話を取り出した。

「連絡を取りやすいように皆の連絡先を交換しようよ」

正直、あまり連絡先を教えたくはないが、これを断る道理も無い。

皆がそれぞれ携帯電話を取り出し、幸成も折り畳み式の深い青色の携帯電話を取り出す。

一人ずつ赤外線アドレスを交換していった……

望遠鏡の隣に散乱した潰れた多くのアルミ缶。

ロイは半ばふて腐れながらシガレットを口にくわえていた。

遠くから見れば髪を金髪に染めた不良少年が煙草を吸っているよう

にしか見えない。

「あゝ、畜生……何で幸成だけなんだろ？」

「少なくとも顔はいいよね？『顔』は……」

優はオレンジジュースを煽りながらつまらなそうにロイに八つ当たりをする。

その様子を面白そうに見ていた彩花は口を開く。

「今回は自業自得ですよねえ？まあ、仕方ありませんねえ。だって彼は任務優先だからあ、優の相手はしなないと思いますしい、ロイももっと誠実にならないと彼女は無理ですよねえ？」

「本当の事を言われると辛い……」

優は体育座りで隅に座るといじける。

子供かと突っ込みたいロイを見て、彩花は目を細めて問い掛けた。

「貴方は堪えてないんですねえ？もしかしたらですけどあ、実は女たらしは狂言でえ、彼女なんて要らないとか思っているんじゃないですかあ？」

彩花の一言にロイは目線を落とし、深い溜息をついて肩を竦めた。

「さあて、どうかな？」

ロイは何でもないように笑うと近くにあった飲みかけの炭酸飲料を一気に飲み干し、缶を潰す。

「誰だって嘘を言う。だが、それが事実かどうかは本人にしか分からない。彩花さんの予想は正解でもあり、誤答でもある。これはいかに？」

ロイは謎掛けのような口調で答えると、彩花は「成る程、良く分かりました」と呟く。

「どういう事？ボクにはさっぱり分からないんだけど……」

「彼はしっかりヒントを言ってますよあ？そして答えもですから、ゆっくりと考えてみて下さいねえ？」

彩花は首を傾げながら優に笑うとティーポットから紅茶を注ぐ。

紅茶はティーカップの半分程でティーポットから出るのを止めた。

「あらあらあ？お茶が無くなってしまいましたねえ？そろそろ切り

上げましょうかねえ。時間も時間ですからあ、幸成も帰って来ますからねえ？」

「ヤバイ！！夕食の支度してないよお……」

優は頬に手を当てながらムンクの叫ぶ宜しく、絶望的に湿った声で呟く。

「幸成関連になると周りが見えなくなるな」

ロイは指を差しながらクツクツと笑いを堪えながら言う。

優は憎らしげにロイを見ると立ち上がると、ロイを見下ろしながら口を開く。

「ロイには夕食を作ってやらないから！！」

「ちよつ！！それは無い！」

ロイは部屋を退出する優にすぎり、彩花だけが夕日が注す部屋に残された。

冷めきつた紅茶の匂いを堪能しながら彩花は小さく呟く。

「謎掛けの答えはあ……誰だって嘘をつき、事実かどうかは本人にしか分からないですよねえ？つまり、自分でも分からないという事でえ、正誤は無いという事ですよねえ、ロイ？」

彩花はそう言うのと紅茶を飲み干した。

（何が在ったんでしょうかねえ、彼は……）

彩花は外を眺めながらティーカップを机に置き、声に出して笑った

……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280x/>

赤眼の狼

2011年11月4日07時08分発行